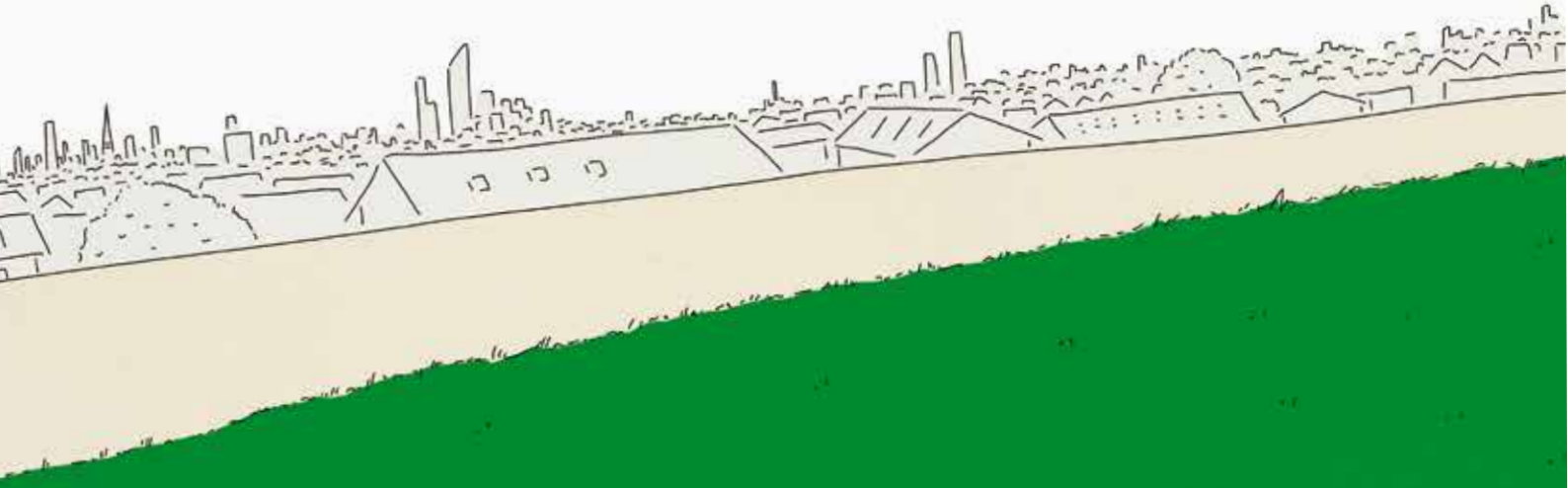


Vent

音楽教育ヴァン vol.41

特集

音楽科における新しい学習指導と学習評価

レポート

作曲家　三宅悠太
『ごんぎつね』のふるさとへ

アウトリーチを観る

ロンドン交響楽団／ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団／
東京都交響楽団＆新国立劇場合唱団＆
サントリーホール オペラ・アカデミー

連載

教科書トリビア　第2回「印刷」

参考楽譜

混声合唱『リアルビクトリー』
（作詞・作曲：栗山龍太／編曲：大田桜子）

KYO-GEI

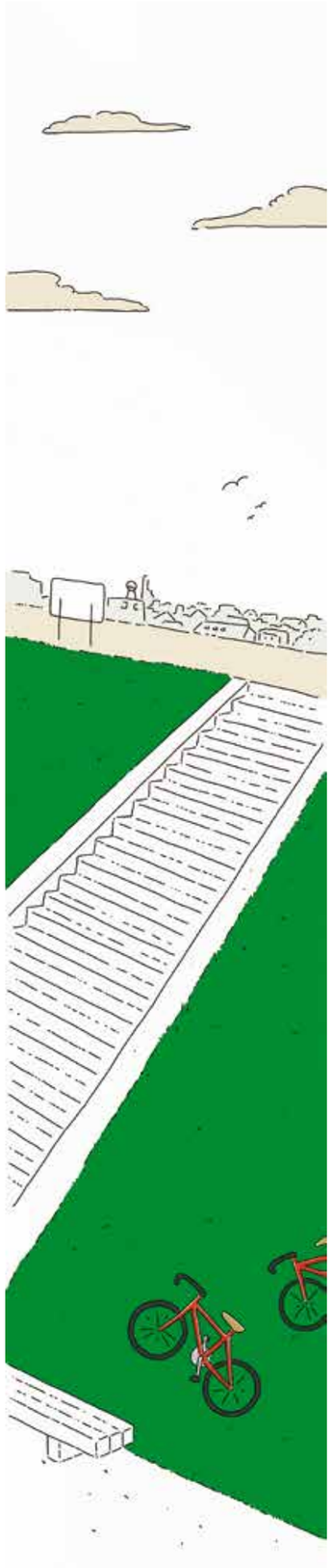
「対話的な学び」で「音楽すること」をともに楽しむ

「対話的な学び」というと、とかく学習の方法や形態に話が行きがちですが、音楽科の授業は、多様な「対話」が響き合う場となっています。すなわち、教材との対話、他者との対話、自己との対話が、音や音楽、言葉や身振りなどを通して行われます。話し合いなど見える形の対話もあれば、音楽に聴き入って自己と向き合ったり、表現した音とイメージをすり合わせたりしている最中の内的な対話など、見えにくいものも少なくありません。このような音楽科では、自由に意見交換できる場や雰囲気をつくるとともに、音や自己とじっくり向き合うような場や時間をつくることが大切です。

子どもが主体的、意欲的に対話や協働を進めていくと、意見や考え、イメージにずれが生じ、衝突や葛藤も生まれて来ます。あまりにスムーズに流れる対話や協働は、むしろ疑った方がよいかもしれません。ずれや衝突、葛藤が新たな学びの契機であり、そうした矛盾を対話を通して乗り越えていくところに、この学びの意義と価値があると考えます。

そのためにも、上から目線で「音楽」を教え込もうとするのではなく、教師自ら対話的に、かつ柔軟性をもって「音楽すること」を子どもと一緒に楽しむことが、子どもの学びを進め、深めることにつながっていくのではないでしょうか。

佐野 靖（東京藝術大学 教授）



Contents

03 特集
音楽科における新しい学習指導と学習評価

14 授業者に訊く１
高橋浩美（埼玉県立秩父特別支援学校 高等部）

19 授業者に訊く２
澤田育子（岐阜県立加納高等学校）

24 レポート
作曲家 三宅悠太『ごんぎつね』のふるさとへ

27 レポート
アウトリーチを観る
ロンドン交響楽団／ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団／東京都交響楽団＆新国立劇場合唱団＆サントリーホール オペラ・アカデミー

32 Kyogei Presents
音楽診断 あなたのタイプは？
［第６回］名作オペラ編（監修・解説：岸 純信）

34 Information

36 参考楽譜
混声合唱『リアルビクトリー』

44 エッセイ
新・音から広がる世界［第１回］藤原道山

46 教科書トリビア［第２回］「印刷」

＊本誌に記載されている職名は令和元年８月現在のものです。

特集

音楽科における新しい学習指導と学習評価

今号の特集では、新学習指導要領の実施にあたって音楽科における学習指導と学習評価をどのように改善していけばよいのかについて、４人の先生がたに話し合っていただきました。３つのテーマ「新学習指導要領における学習評価の改善点と変更点」「教育芸術社の指導書（研究編）を用いた実例の考察」「まとめ～小学校と中学校の連携」を柱に指導と評価のポイントを考えます。

石井ゆきこ先生（港区立芝小学校 主任教諭）
石上則子先生（元東京学芸大学 准教授）
勝山幸子先生（港区立御成門中学校 主任教諭）
齊藤忠彦先生（信州大学 教授）

新学習指導要領における学習評価の改善点と変更点

学習指導要領改訂に伴い、学習評価はどのように示されたのでしょうか。教師に必要とされる視点や、評価規準のポイントなどについて整理します。

学習指導要領改訂にあたって

石上：学習指導要領改訂に際して、小学校で行うことや学習の内容はほぼ変わっていませんが、示し方が大きく変わりました。「資質・能力の三つの柱」（「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」）によって整理されましたので、音楽科もそれに対応していくことになりますね。

石井：今回は、全ての教科において「資質・能力の三つの柱」を育てていくよう示されたことが重要なポイントです。私が関わっている東京都や地区の研究では、「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱に基づいて題材の目標を立てることから始めています。この題材で「どのような知識・技能を得るのか」「子どもが思考・判断・表現していく学習過程をどのように組み立てていくのか」「この学習で学んだことが次の学習や子どもの生活とどう関わっていくのか」を、研究を通して考えていくようにしました。

新学習指導要領は「資質・能力の三つの柱」によって整理されましたので、音楽科もそれに対応していくことになりますね。

○ 石上則子（いしがみ・のりこ）
元東京学芸大学 准教授

齊藤：「資質・能力の三つの柱」が示されたことにより、学力が見えやすくなると思います。しかし学校教育現場では、最初は戸惑いがあるかもしれません。「知識及び技能」は、それぞれ指導内容が示されるようになりましたが、いずれも、「思考力，判断力，表現力等」や「学びに向かう力，人間性等」と結び付けて考えることが大切です。

勝山：「資質・能力の三つの柱」を見ると、「知識及び技能」は子どもたちが将来生きて働いていく力につながりますし、「思考力，判断力，表現力等」は未知の状況にも対応できる力を付けるのだと納得しました。不安な部分はありますが、文言が違っても大事なことは変わっていないので、その点では安心です。題材レベルや授業レベルで考えるときに、「『音楽表現の創意工夫』は『思考・判断・表現』だな」と整理していくことになりますよね。「知識及び技能」という言葉と関連させて授業をつくる中で、生徒の理解の質を追求していきたいと思っています。

石上：現行の学習指導要領では小学校の場合、聴き取りや感じ取りをとても大事にしていました。それらは音楽科ならではの感性に関わる重要な内容ですが、聴き取ったことと感じ取ったこととの関連性が見えにくい授業も行われていたように思います。新学習指導要領に基づいて「思考・判断・表現」を評価する際は、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりを考えることが重要で、それが子どもたちが曲や演奏のよさを見いだすことにつながると思います。

石井：そして、子どもたちが曲や演奏のよさを見いだすことが、新学習指導要領の教科の目標に新しく加えられた「音楽的な見方・考え方」につながるのですね［資料1］。

「音楽的な見方・考え方」とは

石上：そこで注意したいのは、〔共通事項〕アが少し変わり、「知覚したことと感受したこととの関わりについて考えること」という文言が加えられたことです［資料2］。イの「音楽における働きと関わらせて」という文言も、以前より強調された印象があります［資料3］。ここで重要なのは、子どもが音楽活動を通して「音楽的な見方・考え方」を働かせることであり、それは評価の対象にはなりません。教師はこれまで子どもたちの学んできたことを把握したうえで次の学習に向かい、さらに子どもが学習したことをもう一度、子どもたちの中に落とし込む必要があると考えています。

齊藤：「音楽的な見方・考え方」は今回の改訂で初めて示されましたが、「見方・考え方」という言葉は全教科で用いられており、それぞれの教科の特質が現れています。音楽科においても、より教科の特質がはっきりと見えてくるので、よい方向付けになるのではないでしょうか。『学習指導要領解説』には、まず「音楽に対する感性を働かせ」という感性的な内容が記され、続いて「音や音楽を，音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え」という知性的な内容が記されています。ここには〔共通事項〕アに示された知覚と感受が入り込んでいるのです。さらに音や音楽を「自己のイメージや感情，生活や社会，伝統や文化などと関連付けること」と示されています。これらをしっかり理解することが、これからの授業づくりにおいて必要ですね。

石井：前回の改訂では〔共通事項〕の新設が目玉でした。今回は「音楽的な見方・考え方」が示され、「関わり」がキーワードになっています。「子どもが音楽とどう関わるか、子どもが〔共通事項〕に示された音楽を形づくっている要素をどう聴き取り感じ取るか」という学習者の視点をもつことがますます大切になってきます。

勝山：「音楽的な見方・考え方」が示されたことで「なぜ学校で音楽を勉強するのか？」という音楽科の意義が、より強く意識されたと思います。「音楽的な見方・考え方」は、音楽の学習そのものであり、心構えと捉えています。

「知識・技能」の捉え方

石井：「知識・技能」の評価を見てみると、小学校では今までの捉え方とは異なるので、先生たちは戸惑うのではないかと思います。

齊藤：「知識及び技能」に関してはそれぞれ指導内容が示されているので、実際の授業の場面では、評価も分けて行うことになります。小学校よりも中学校のほうが、知識と技能を分けて評価しやすいかもしれません。

石上：「知識・技能」の評価規準は難しいですね。「知識」とは、ドレミや*f*の記号を覚えることだけではありません。例えば歌唱の評価では、曲の構造を理解するだけではなく、曲の構造と曲想とがどう関わっているかを子どもが理解することが求められています［資料4］。教師が「こういうふうに歌いなさい」というのではなく、子ども自身が気付いていくような授業を行うことが大切だと思います。今まで小学校で行ってきた「音楽表現の創意工夫」の根拠になっていたのが「知識」なのではないでしょうか。

勝山：例えば「知識」がAで「技能」がCという場合、またはその逆もありますよね。評価の枠は一緒でも、「知識」と「技能」は

「音楽的な見方・考え方」は今回の改訂で初めて示されましたが、「見方・考え方」は全教科で用いられており、それぞれの教科の特質が現れています。

○ 齊藤忠彦（さいとう・ただひこ）
信州大学 教授

［資料1］教科の目標

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して，音楽的な見方・考え方を働かせ，生活や社会の中の音や音楽，音楽文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
(1)　曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに，創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。【知識及び技能】
(2)　音楽表現を創意工夫することや，音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。【思考力，判断力，表現力等】
(3)　音楽活動の楽しさを体験することを通して，音楽を愛好する心情を育むとともに，音楽に対する感性を豊かにし，音楽に親しんでいく態度を養い，豊かな情操を培う。【学びに向かう力，人間性等】

［資料2］〔共通事項〕アについて　思考力，判断力，表現力等

平成20年告示	平成29年告示
ア　音色，リズム，速度，旋律，テクスチュア，強弱，形式，構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受すること。	ア　音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，知覚したことと感受したこととの関わりについて考えること。

「第3　指導計画の作成と内容の取扱い　2の（9）」
各学年の〔共通事項〕に示す「音楽を形づくっている要素」については，指導のねらいに応じて，音色，リズム，速度，旋律，テクスチュア，強弱，形式，構成などから，適切に選択したり関連付けたりして指導すること。

［資料3］〔共通事項〕イについて　知識

平成20年告示	平成29年告示
イ　音楽を形づくっている要素とそれらの働きを表す用語や記号などについて，音楽活動を通して理解すること。	イ　音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる用語や記号などについて，音楽における働きと関わらせて理解すること。

指導に当たっては，単に名称などを知るだけでなく，音楽活動を通してそれらの働きを実感しながら理解し，表現や鑑賞の学習に生かすことができるように配慮する必要がある。また，そのことによって，用語や記号などの大切さを生徒が実感できるようにすることが大切である。（p.65）

［資料1～3］は『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』より
※【 】内と下線＿はヴァン編集部による

別々に評価する必要があると思います。しかし２つが一体になっている階層もあります。本来は、知識と技能が一体となって音楽の中に生きて働くことを目指しているのでしょう。「こういうふうに表現したい」「こういう音楽をつくりたい」など、「思考・判断・表現」したことを音楽で表せるかという点が「技能」になります。

石上：「技能」については明確になった印象を受けます。今まで現場では、例えば「曲想に合った表現で歌えているか、演奏できているか」というように、少し漠とした評価の仕方がされていたように思います。それが今回の改訂で「曲想に合わせるために、どのような発声や発音が必要なのか、どんな演奏をしているか」というところまで示されたことにより、評価すべきことがはっきりしたのではないでしょうか。「知識」をどのように捉えればよいのかが明確になれば、「知識・技能」を評価しやすくなると思います。

石井：小学校では１つの題材の中にさまざまな教材が含まれており、複数の領域や分野を組み合わせて構成することが多いので、単純に３観点に分けてしまうと、評価項目がとても増えてしまいます。１時間のうちにいくつも評価することはできませんから、例えば題材の中に歌唱と鑑賞が含まれるときは、どちらにも共通なものを「知識」として位置付けていくなど、バランスや精選を考える必要があります。

石上：小学校では教師が「知識・技能」を分析して一度分けて考えるようにし、またそれを結び付けることになるので、その作業が大変です。そしてこの「知識・技能」が、２つ目の観点「思考・判断・表現」に連動していくことになります。

「子どもが音楽とどう関わるか、子どもが〔共通事項〕に示された音楽を形づくっている要素をどう聴き取り感じ取るか」という学習者の視点をもつことがますます大切になります。

○ 石井ゆきこ（いしい・ゆきこ）
港区立芝小学校 主任教諭

［資料４］評価の観点及びその趣旨

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解している。 創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付け，歌唱，器楽，創作で表している。	音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，知覚したことと感受したこととの関わりについて考え，どのように表すかについて思いや意図をもったり，音楽を評価しながらよさや美しさを味わって聴いたりしている。	音や音楽，音楽文化に親しむことができるよう，音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に表現及び鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

文部科学省「小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」〔別紙４〕より

鑑賞で「思考・判断・表現」をどう評価するか

石上：これまでの鑑賞の評価では、「音楽への関心・意欲・態度」と「鑑賞の能力」を見取っていました。今回の改訂で「創意工夫」が「思考・判断・表現」になることで、鑑賞の「思考・判断・表現」の能力とされる「曲や演奏の楽しさ※を見いだし，曲全体を味わって聴くこと」を見落としがちになります。その他、表現と鑑賞の組み合わせである題材の中では「知識」が抜けてしまうこともあります。教師が題材全体の構成と評価との関わりを十分に理解して学習を展開することが重要です。

石井：小学校の鑑賞に関しては能力ベースの指導事項になって、指導内容の具体が分かりづらくなったように感じています。評価ではどこまでが「知識」なのか、どこからが「思考・判断」なのかを、判断することが難しい場合もあります。

石上：「味わって聴く」ためには、子ども自身が腑に落ちたと感じることが必要ですが、「曲や演奏の楽しさ※」は理解する面も関わってくるので、「知識」とどう分けるのかが難しいですね。何をどこで評価すべきかを明確にし、評価の場面をしっかり押さえておく必要があります。「今は知識」「今は話し合いながら思考を深めているので思考・判断・表現」というように考えれば評価しやすくなります。授業展開と評価規準を併せて考えていくことが大事かなと思います。

※３～６年生は「よさなど」

常に音楽活動と結び付けながら

石井：小・中学校では、授業の中で音を出している時間が減ってきたという話を聞きます。「主体的・対話的で深い学び」とありますが、「対話的」という言葉だけが注目されがちなので、私自身も気を付けています。

勝山：中学生になると、言語活動が活発になってきます。それ自体はとてもよいことなのですが、「ほんとうに音楽としてそう感じているのか」というところまで私たちは踏み込まなくてはなりません。実際に歌ってみて、演奏してみて、つくってみて、聴いてみて、気付いたことや考えたことを授業の中で大切にしていきたいです。

石井：中学生は生徒どうしで話し合うことが好きなので、そこに時間を取られがちかもしれませんね。

勝山：まさにそのことが今年の全日本音楽教育研究会全国大会（東京大会）の課題の一つです。いかに音楽活動と絡めて実感しながら音楽科としての学習ができるかを、大きな研究の柱としています。

石上：新学習指導要領には「音楽科の特質に応じた言語活動」と書いてあり、重要ですが難しいところではありますよね。授業数も少ないですから。

「主体的に学習に取り組む態度」で求められること

石上：ある先生が「３観点のうちの『主体的に学習に取り組む態度』に関しては、学んできた結果、子どもの関心・意欲がどうなっていったかを題材の最後に見取る、ということもありますよね」とおっしゃったのを聞いて、そういう展開もあると考えています。「主体的な学習」については、平成31年１月に文部科学省で取りまとめられた「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」の中でも、ページがしっかり割かれています。生涯生きていくうえで、学びに向かう力はとても大切であるということなのでしょう。

齊藤：その題材で学習が終わってしまうのではなく、その題材を通して学んできたことを今後どのように生かしていくことができるかということも含めて、子ども自身の「自らの学習を調整しようとする側面」を評価するのは難しいですよね。教師はワークシートの記述などからも読み取っていく必要があるかもしれません。指導するためにはそこまで先を見通してまとめ、最後に「主体的に学習に取り組む態度」の評価をするケースも出てくるでしょう。

勝山：「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、評価場面の精選、評価方法など、今回の改訂を機にしっかり考え見直していきたいと思っています。音楽科だけでなく、他教科とも連携し、学校全体で「主体的に学習に取り組む態度」の評価について考えることが必要かもしれません。

齊藤：「主体的に学習に取り組む態度」について、「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」の２つの側面で説明されていますが、そのバランスが大切になると思います。

石井：粘り強く取り組む態度と同時に、子ども自身が見通しをもたないまま、やみくもに取り組むことのないよう、自らの学習を調整しようとする態度を身に付けることが求められているのでしょうね。

齊藤：教師の指導法の一つとして提示された面もあるでしょう。

石上：「主体的に学習に取り組む態度」には個人内評価も含まれます。これに関しては、小学校で担任の先生がポートフォリオ評価をしている例があります。学期末や学年末に、学んできたものを作品集にして子どもたちに手渡しています。また理科を専門にする先生で、子どもが思考したことを学級新聞にして配っているのを見たこともあります。ポートフォリオ評価では、子どもを長い目で丁寧に見取ることが可能です。保護者の

音楽科だけでなく、他教科とも連携し、学校全体で「主体的に学習に取り組む態度」の評価について考えることが必要かもしれません。

○ 勝山幸子（かつやま・さちこ）
港区立御成門中学校 主任教諭

かたにも説明できますしね。

勝山：ポートフォリオのように目に見える形にすると、子どもと、教師と、保護者と、学習の積み重ねが共有できるのでいいですね。

齊藤：音楽の場合、小学校も中学校も１人の先生が通して受け持っている学校もありますしね。

石上：学校の実態にもよりますが、これからはより丁寧な評価が必要になってくるでしょう。

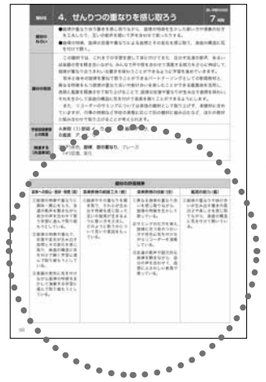
勝山：今回の改訂で、「主体的に学習に取り組む態度」をどう見取っていけばよいのかを、教師である私たちが今まで以上にオープンにして研究していく必要があると思います。

［資料］は全て例として中学校のものを掲載しています。

教育芸術社の指導書(研究編)を用いた実例の考察 小学校編

ここでは教育芸術社の指導書(研究編)から評価規準を抜粋し、「題材の評価規準」が新学習指導要領ではどのように変更になるのか考察します。小学校教諭の石井ゆきこ先生と、中学校教諭の勝山幸子先生に実際に示していただきました。

執筆・構成：
石井ゆきこ



教育芸術社『小学生の音楽４』
指導書研究編P.50
題材名
「４．せんりつの重なりを感じ取ろう」

ピックアップ！

ポイント

小学校は単純に３観点に分けてしまうと評価項目が増えてしまうので、題材の中に歌唱と鑑賞が含まれるときは、共通するものを「知識」に位置付けるなど、バランスを考えます。また、鑑賞において「知識」「思考力・判断力」を判断するためには、評価規準の場面を明確にする必要があります。

例 第４学年「せんりつの重なりを感じ取ろう」

■…題材で主に扱う音楽を形づくっている要素
—…題材で主に扱う音楽を形づくっている要素と関わりのある学習内容

現行 学習指導要領 ◇題材の評価規準（４観点）

題材の流れ	音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
第１時　歌唱 パレード ホッホー	①旋律の特徴や重なりに興味・関心をもち，友達の歌声を聴きながら，自分の声を合わせて歌う学習に進んで取り組もうとしている。			
第２時　鑑賞 ファランドール	②旋律の特徴や重なり，反復や変化が生み出す曲想とその変化を感じ取り，楽曲の構造に気を付けて聴く学習に進んで取り組もうとしている。			鑑賞の能力は「知識」「思考・判断・表現」に 分けて評価する。
第３時 前半　鑑賞 ファランドール				①旋律の重なりや掛け合いが生み出す響きの面白さや美しさを感じ取りながら，楽曲の構造に気を付けて聴いている。
後半　歌唱 パレード ホッホー			①異なる旋律の重なり合いを感じ取りながら，旋律の特徴を生かして歌っている。	
第４時　器楽 雨の公園	③楽器の音色に気を付けながら旋律の特徴を生かして演奏する学習に進んで取り組もうとしている。			
第５時 器楽 雨の公園 ハッピー バースデイ トゥ ユー			②サミングの仕方を覚え，旋律に合う息のつかい方や音色に気を付けながらリコーダーを演奏している。	
第６時 歌唱 もみじ	①旋律の特徴や重なりに興味・関心をもち，友達の歌声を聴きながら，自分の声を合わせて歌う学習に進んで取り組もうとしている。 ＊第１時と同じ評価規準	音楽表現の創意工夫は「知識」「思考・判断・表現」に分けて評価する。	音楽表現の技能は「技能」で評価する。(一部，「知識」「思考・判断・表現」の内容が含まれる場合もある。)	
第７時 歌唱 もみじ		①旋律やその重なりを聴き取り，それらが生み出す特徴を感じ取って，互いの旋律が生きるように歌い方を工夫し，どのように歌うかについて思いや意図をもっている。	③友達の歌声や副次的な旋律を聴きながら，自分の声を合わせて，曲想にふさわしい表現で歌っている。	

新 学習指導要領 ◇題材の評価規準（３観点）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①曲想と旋律の特徴や重なり，歌詞の内容との関わりに気付いている。〈歌唱：知識〉		本題材で主に扱う音楽を形づくっている要素で領域・分野を関連付ける。
②曲想及びその変化と，旋律の特徴や重なり，反復や変化との関わりに気付いている。〈鑑賞：知識〉	①旋律の重なりや掛け合いを聴き取り，それらの働きが生み出す響きの面白さや美しさを感じ取りながら，聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え，曲のよさなどを見いだし，曲全体を味わって聴いている。〈鑑賞〉	①曲想及びその変化と，旋律の特徴や重なりなどとの関わりに興味・関心をもち，曲のよさを見いだしながら曲全体を味わって聴く学習に進んで取り組もうとしている。〈鑑賞〉
③異なる旋律の重なり合いを感じ取り，旋律の特徴を生かしながら声を合わせて歌っている。〈歌唱：技能〉		
④楽器の音色とサミングの演奏の仕方との関わりに気付いている。〈器楽：知識〉	②リコーダーの演奏の仕方を生かしながら旋律の特徴を捉えた表現を工夫し，どのように演奏するかについて思いや意図をもっている。〈器楽〉	②曲想と旋律の特徴や重なり，楽器の音色や響きと演奏の仕方との関わりに興味・関心をもち，音色に気を付けて演奏する学習に進んで取り組もうとしている。〈器楽〉
⑤旋律に合う息のつかい方や音色に気を付けてリコーダーを演奏している。〈器楽：技能〉		
	③旋律やその重なりを聴き取り，それらが生み出す特徴を感じ取りながら，聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え，互いの旋律が生きるように歌い方を工夫し，どのように歌うかについて思いや意図をもっている。〈歌唱〉	本題材では「主体的に学習に取り組む態度」を継続的に観察・記録し，題材の後半で評価する。 ③友達と協働し，互いの歌声を聴きながら自分の声を合わせて歌う学習に進んで取り組もうとし，曲想と旋律の特徴や重なり，歌詞の内容との関わりについて関心を深めようとしている。〈歌唱〉
⑥友達の歌声や副次的な旋律を聴きながら，自分の声を合わせて，曲想にふさわしい自然で無理のない歌い方で歌っている。〈歌唱：技能〉		

教育芸術社の指導書(研究編)を用いた実例の考察 中学校編

執筆・構成：
勝山幸子

歌唱

教育芸術社『中学生の音楽２・３上』
指導書(研究編)P.15
「夏の思い出」

ピックアップ！

例 第２学年「夏の思い出」

現行 学習指導要領

評価規準

関 ❶歌詞の内容や曲想に関心をもち，曲にふさわしい音楽表現を工夫して歌う学習に主体的に取り組もうとしている。

創 ❶旋律の音の動きやフレーズ，強弱，伴奏を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，歌詞の内容や曲想を味わって曲にふさわしい音楽表現を工夫し，どのように歌うかについて思いや意図をもっている。

技 ❶歌詞の内容や曲想を生かした，曲にふさわしい音楽表現をするために必要な発声，言葉の発音，呼吸法などの技能を身に付けて歌っている。

（関…音楽への関心・意欲・態度　創…音楽表現の創意工夫　技…音楽表現の技能）

新 学習指導要領

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①曲想を音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解している。 ②創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声，言葉の発音，身体の使い方などの技能を身に付け，歌唱で表している。	旋律，強弱，構成を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，知覚したことと感受したこととの関わりについて考え，どのように歌うかについて思いや意図をもっている。	曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりに関心をもち，音楽活動を楽しみながら，主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組もうとしている。

鑑賞

教育芸術社『中学生の音楽１』
指導書(研究編)P.37
「魔王」

ピックアップ！

ポイント

文言は変わっても大事なことは変わっていませんから、これまでの評価規準を１つずつ整理していくことになります。「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、評価場面の精選、評価方法など、改訂を機に見直していく必要があるでしょう。

例 第１学年「魔王」

現行 学習指導要領

評価規準

関 ❶詩の内容と曲想とのかかわりに関心をもち，鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。

❷声やピアノの音色，登場人物の心情や情景を表した旋律，強弱の変化と曲想とのかかわりに関心をもち，鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。

鑑 ❶声やピアノの音色，登場人物の心情や情景を表した旋律，強弱の変化を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受している。

❷知覚・感受しながら，音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って，解釈したり価値を考えたりし，言葉で説明するなどして，音楽のよさや美しさを味わって聴いている。

（関…音楽への関心・意欲・態度　鑑…鑑賞の能力）

新 学習指導要領

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
曲想と音楽の構造や背景などとの関わりについて理解している。	音色，旋律，強弱を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，知覚したことと感受したことの関わりについて考えるとともに，曲や演奏に対する評価とその根拠について自分なりに考え，曲のよさや美しさを味わって聴いている。	曲想と音楽の構造との関わりに関心をもち，音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

まとめ～小学校と中学校の連携

最後に、これからの学習評価の課題や大切にしたいこと、学校段階間の連携などについて、先生がたのお考えを語っていただきました。

新しい評価への対応は

石井：今回、示された学習評価の観点についていちばん変わったと感じるのは、「主体的に学習に取り組む態度」です。子ども自身が授業の見通しをもち、何を学んだのかを振り返ることが大切なので、そのことを意識して授業をする教師が増えてきたと思います。これからは学習の積み重ねの中で関心をもったことや、粘り強い取組を行おうとする態度、自らの学習を調整しようとする態度を、教師が見取っていかなくてはいけません。東京都小学校音楽教育研究会（以下、都小音研）では、指導案を作成するとき、「この学習場面でどの資質・能力を評価するのか」を絡めながら題材を設定するようになりました。私自身は子どものつぶやきに耳を傾け、次の学習に生かすことを、これまで以上に意識するようになりました。

勝山：中学校では来年度までは４つの観点で評価します。ですから、三つの柱で整理された指導内容で授業を組み立てる場合は、来年度までは評価規準の設定に十分気を付けたいと思います。今は４つの観点を理解して、きちんと評価していくことが大事です。観点が３つになると、指導と評価が一体化した学習指導案は立てやすくなると思いますが、同時に、実際の学習活動での切り離しにくいものも分けて評価しなければならない難しさも感じます。今後は評価場面や評価方法の工夫が求められると思います。

齊藤：中学校全体を見ると、評価に関してはすっきりした印象です。全ての評価が３観点になり、目標、指導事項、評価が一体化されるので、今後授業を構想するときには分かりやすくなると思います。今までは授業の題材を検討するとき、評価の４観点のうちからいくつかに焦点を当てていましたが、これからはどの題材にも３観点全部を入れる必要があり、「資質・能力の三つの柱」が全てに組み込まれる形になります。ただし、毎時間必ず３つを入れる必要はないので、精選した題材を組むことにもつながるでしょう。

石上：評価をするということは、教師が子どもをどう見るかということです。小学校も今年度いっぱいは移行期なので４観点で見ています。この４観点の評価をまずは現場でもしっかりと見直す必要があります。これを見直しながら、新しい３つの観点の評価の在り方を研究していくことが大事だと思います。

石井：都小音研では来年度の全面実施に向けて、３観点の評価についても研究しています。現在示されている情報によると、新学習指導要領の指導事項と評価規準の文言が、ほぼイコールになっています。私は「評価規準の作成に悩むより、子どもたちが主体的に学ぶ学習過程や教師の適切な支援をより具体的に考えて充実させてください」というメッセージだと受け取っています。

齊藤：「資質・能力の三つの柱」の「学びに向かう力，人間性等」が、評価では「主体的に学習に取り組む態度」になり、感性や思いやりなどが個人内評価として分けられた点は特徴的だなと思いました。個人内評価では、その場その場で子どもたちに声をかけながら評価することも大切になるのではないかと思います。

各段階の連携と発達段階に応じた学習

石上：これまでの学習指導要領では、目標や評価の設定が、小学校と中学校で違っているように感じていましたが、今回の改訂でかなりそろってきたなと感じました。目標や評価の具体的な観点のつながりがより見えてきたので、さらに小・中学校のつながりの中で学びが深まっていくでしょう。また、中学校と高等学校のつながりもより強く示されています。そこがこれからの課題となるのではないでしょうか？

勝山：現場では、小学校と中学校の連携が必要だと言われています。以前に比べて今は年に何度も集まり、小学校と中学校がお互いに授業を見る機会を少しずつ増やしています。実際に小学校の音楽の授業を見て「今教えている生徒はこういう授業を受けてきたんだ」と知ることで、そこからさらに進んだ授業をしなければと意識するようになりました。小学校の授業を見て感じたことは、音楽科の学習として小学校と中学校で違いはなく、表現も鑑賞も発達段階に合わせて教材や深さを変えるだけで、目指しているものは同じなのだということです。もちろん生徒の発達段階に応じた注意点などはありますが。特に中学校では「知識」を実感を伴いながら理解し、表現や鑑賞に生かすことができるようにすることが課題です。中学校は義務教育の出口ですから、「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」を関連付けながらバランスよく身に付け、自分にとっての音楽や社会にとっての音楽の意味を見いだせるようにして卒業させてあげたいと思います。

石井：小学校では、幼稚園から上がってきたばかりで幼児期と差がないような１年生もいます。また、低学年の子どもたちは遊びながら感覚で知識を得ているところもあります。勝山先生のおっしゃった「発達段階に応じた」学習を教師が理解しておく必要があります。

左から石上則子先生、石井ゆきこ先生、勝山幸子先生、齊藤忠彦先生
（2019年7月15日）

石上：保育園や幼稚園から小学１年生になると、環境が大きく変わります。多くの子どもは喜んで入学してきます。しかし中には、小学校に入学する心構えができておらず、環境の変化になじめない親子も見受けられます。ですから教師は入学前に子どもが何を学んできたのかを知っておかないと、子どもの様子が見えなくなってしまいます。幼稚園と小学校の連携の場面において、音楽科はつなぎやすい教科だと感じます。一方で、「生活や社会の中の音や音楽，音楽文化と豊かに関わる資質・能力」の育成が目標に掲げられたにもかかわらず、予算の問題などもあり、行事や鑑賞教室が減ってしまう地域もあります。

勝山：音楽科が、そういう行事を十分に生かしきれていなかった面があったかもしれません。行事を含めた学校生活全体と音楽の授業とを絡めて、「音楽っていいよね」と子どもが実感できる場面を音楽科が積極的につくり、音楽科の意義をもっとアピールしていく努力も必要ですね。

石上：行事と音楽の授業がうまくつながっていけばいいですよね。実際に音楽鑑賞教室へ行って感動し、フルートやお箏を個人的に習い始める子どももいますから。

齊藤：生活や社会と関連させることが今回の改訂で強く示されているので、音楽科がそれを生かすチャンスだと思います。子どもたちが音楽教育の意義を感じられることが大事なので、これを機に子どもたちが学校で学んだ音楽を実際の生活に役立てたり、生活や社会の中で広がりを感じられたりする、授業や評価を工夫していけたらいいですね。

石上：子どもの生活の中に音楽が根付くことを、教師はいろいろな角度から大切に意識して進めたいですね。

高橋浩美先生作詞・作曲の『Song is my soul』を歌う

授業者に訊く①

今回の「授業者に訊く」は、特別支援学校と高等学校音楽科の授業です。最初にご紹介するのは、秩父特別支援学校の高等部(全学年)。生徒たちの誰もが積極的で、楽しそうに活動に取り組む姿が印象的でした。以前は中学校で指導されていた高橋浩美先生が特別支援学校に来て指導で感じたことや大切にしていることなどについて、お話を伺いました。

授業者：高橋浩美（埼玉県立秩父特別支援学校）　**聞き手：松井孝夫**（聖徳大学 准教授）

本時の授業の位置付け

今年度の高等部の音楽のテーマは「和」です。前時の授業は三味線の体験で、全員が三味線を膝にのせ、音を体感することができました。

本時では『秩父音頭』の歌に挑戦します。毎年本校の運動会の最後に『秩父音頭』を踊りますが、歌い手は高等部の生徒の有志です。学習内容は『秩父音頭』の歴史を知り、旋律の上がり下がりの感じをつかむことです。太鼓のリズムにのり、民謡の「声を張って歌う感じ」を、楽しみながら表現することが目標です。

授業の流れ

	学習の内容、学習活動
導入	・あいさつ ・7月8月生まれのハッピーバースデー ・仲間の好きな歌を知るコーナー ・アトムの肩たたき、声出し ・『Song is my soul』を歌う。
展開	・『秩父音頭』の歴史や歌詞の意味などについて話を聞く。 ・太鼓のリズムを膝の上でたたいてみる。 ・昨年度の歌い手の歌を聴く。 ・模造紙の歌詞を見ながら歌う。合いの手も練習する。
まとめ	・特別活動で太鼓を学ぶ友達のお囃子に合わせて歌う。 ・ソロを募る。ソロの人はマイクで歌う。 ・あいさつ

高橋浩美先生と松井孝夫先生
卒業式の定番ソングとして全国で歌われている『旅立ちの日に』を作曲した高橋浩美先生(旧姓：坂本浩美先生)を授業者に、同曲を編曲した松井孝夫先生を聞き手にお迎えして対談を行いました。お２人のつながりは、以前に高橋先生が参加した研究会で偶然にも隣の席に松井孝夫先生の奥様が座ったことから始まったそうです。

一人一人に寄り添い、生徒の「好き」を見付けて組み立てる授業

重複学級の音楽の授業

松井：授業を拝見し、「ああ、浩美さんだな」と思いました。先生が元気でテンポもよくて言葉遣いも丁寧で、さらに生徒たちを受容する懐も深い。こちらの学校では、障害を併せ持つ生徒とそうではない生徒(以下、一般)とを分けているのですね？

高橋：複数の障害を有したり、障害の程度が重い生徒さんは、重複学級(以下、重複)に在籍します。高等部では、できることは集団の中で行いながら、将来的な生活も見据えて授業を展開します。

松井：重複の生徒たちは、どのように音楽の授業を受けるのですか？

高橋：一般の生徒と一緒に受けます。音楽の教員は、ここ数年私１人しかいない状態が続いていました。１人でピアノを弾きながら、生徒50人と先生20人を束ねるのは大変なことです。重複の生徒は、歌うことも難しく、もっと違う形で指導できるのでは……と、ずっと悩んでいました。

松井：生徒自身で表現することが難しいのですね。

高橋：そうなんです。重複の生徒に応じた指導を行うことは、全教科共通の課題になっています。そこで昨年、誰でも実践できる、重複の生徒たちのための音楽の授業をつくり始めました。

松井：どのようにしてつくったのですか？

高橋：全国の特別支援学校の先生がたの取り組みに関する本を読んだり、実際に問い合わせたりしました。他教科の先生とも協力して夏休みに準備し、２学期にプレ授業を行いながら本校の生徒の実態に合った授業を目指してきました。現在は、一般の生徒たちが音楽室で歌の授業などを行っている間、重複の生徒たちが隣の会議室でいろいろな楽器を楽しみながら担任の先生と体をほぐすなど、一人一人が音楽を楽しめるスタイルで取り組んでいます。今年度は音楽の先生が初めて２人体制になったので、より本格的な重複に在籍する生徒の音楽のスタイルをつくっています。たとえ歌えなくても、「やってよかったな」という気持ちを味わわせてあげたかったのです。

特別支援学校はヒントの宝箱

松井：音楽の授業は週に何回ですか？

高橋：１回です。行事や実習の関係で実施できないことはあります。必ず全学年で授業を行いますが、教室を分けてグループ授業にし、各学年の先生にノウハウを伝えて行うこともあります。いつもみんなが元気に音楽室に入って来てくれて、授業の前から準備を始めます。「先生、今日は何をやるの？」と聞いてくれるのがうれしいですね。

松井：通常の学級の課題でもある、顔の体操や声出しなどを、ここの生徒たちがしっかりとこなしているのはすごいなと思いました。高橋先生は以前中学校で教えてらっしゃいましたが、比較するとどのように感じますか？

高橋：ここでは生徒一人一人の実態や障害の状況、その日の体調を考慮しながら、ゼロから授業をつくり上げなければなりません。中学校で教えていた頃は「教材をどう料理して伝えるか」からスタートしていましたが、特別支援学校では「この生徒はこの音が苦手かな？ 好きかな？」という、もっと前段階からのスタートになります。こうした視点をもつことは、通常の学級でうまくいかない

導入の活動「アトムの肩たたき、声出し」

○ 松井孝夫（まつい・たかお）
聖徳大学 准教授

生徒の対応においても大切です。ここは、教育のヒントの宝箱です。もちろん中学校での経験が生きていますが、特別支援学校での経験もまた、全てに通じると思うのです。

松井：生徒の内面を見つめることがスタートなのですね。集中力が続かない生徒に対する指導の工夫やコツはありますか？

高橋：まずは、集中力が続かない理由を考えます。音楽が嫌いなのかもしれないし、他に理由があるのかもしれない。だからその生徒自身が満足できるスタイルを一緒に考えてます。すると少し、心を開いてくれるので、それから生徒自身が「やってみようかな」と思えるスタートをつくっていきます。他にも生徒が何か反応してくれたことに対して、「ありがとう」「分かったよ」と共有を繰り返すことが大事です。例えば生徒が必ずしも授業の場にいなくても、それがその生徒にとってよいのであれば、それでいいんです。必ず「なぜそうなったのかを共に考える」ことが大切です。通常の学級では難しいことですが、そのような発想もあると思います。

生徒の好きなことを見付ける

松井：授業では生徒たちが生き生きとしていて、みんな音楽を好きなことが伝わってきました。生徒が好きな音楽を発表する「仲間の好きな歌を知るコーナー」では、自宅から持ってきた竜笛で『君が代』を吹いた生徒がいて驚きました。楽譜もみんなに見せてくれました。

高橋：あのように、きちんと前に立てる生徒もいれば、それが難しい生徒もいます。難しい生徒は、担任の先生と相談しながらその日の状態や心理的な環境を確認しながら進めていきます。あの生徒は音楽が大好きですから、自分が紹介される順番を待っていて、楽器を持ってきたんですね。

松井：生徒たちの発表した好きな音楽は、J-POPからクラシック、雅楽まで幅広いジャンルですね。他の生徒も一生懸命発表を聴いていて、いい場面だなと思いました。

高橋：高校生は、音楽をきっかけに友達とつながることが多いと思いますが、ここでは教師が働きかけをしないと、生徒どうしがなかなかつながっていきません。今日のような発表をすると、休み時間にCDを貸し借りしたり、さらには先生も生徒とつながったりして、いろいろな関係性が生まれていきます。

松井：高橋先生作詞・作曲の『Song is my soul』も立派に歌っていました。2学期は男声と女声の二部で歌うのですね。

高橋：合唱が盛んな中学校から特別支援学校に入学した生徒は、この高等部で最初の音楽の授業を受けたときに物足りなく感じるようです。基礎的な内容を教えていたとき、合唱が大好きな生徒に「先生つまらない」と言われたので「これから少しずつレベルアップしていくからね」と伝えたこともありました。

松井：特別支援学校の児童生徒は、ストレートに「嫌なものは嫌」と言ってくれるので、こちらも「よし、やらなきゃ！」と思うのですね。

高橋：ストレートなのは教師としては怖い面もありますが、大切なことですよね。皆それぞれ、好きなことがあるはずですから、私はそれを見付けてあげて、授業の中で組み立てていくことが大事だと思っています。

「仲間の好きな歌を知るコーナー」（本時は２年２組の生徒が発表）では、自宅から竜笛を持ってきて演奏を披露した生徒もいた

音楽に境界線はない 地元に根付いた『秩父音頭』を

松井：『秩父音頭』は、学び始めたばかりなのに生徒たちはしっかりと歌っていました。

高橋：幼い頃から夏祭りや小・中学校の運動会など、さまざまな場面で聴いている経験が大きいのでしょうね。私たち教師は「民謡だから」「合唱曲だから」という境界線をつくりがちですが、子どもに境界線はありません。今年の運動会の歌い手に立候補した生徒から、「今日の昼休みは『秩父音頭』のレッスンはないんですか？」と聞かれることもありますよ（笑）。

松井：大人は境界線をつくりがちですから、固定観念を取り払わないといけませんね。『秩父音頭』は毎年運動会で行うのですか？

高橋：はい。９月末の運動会の最後に、全校の児童生徒で踊ります。

松井：生徒たちの好きな音楽の他、『秩父音頭』や民謡をみんなで共有することは、新学習指導要領の「生活や社会の中の音や音楽，音楽文化と幅広く関わる」という目標にもつながりますね。秩父音頭は以前から教材として授業で扱っているのですか？

高橋：中学校で教えていた頃に、鑑賞教材の一つとして取り上げたことはありますが、歌うことまで踏み込んだのは今から５年程前からです。最初は歌ってくれるかどうか心配しましたが、実際はすごく歌う。生徒が友達の太鼓や楽器の音に助けられて歌えるような雰囲気づくりを意識しながら、音高を手の位置で示したり、リズムにのって歌うことを教えたりしています。「“恥ずかしさなんか捨てちゃえ！”って感じで歌う歌だよ」と促すと、生徒たちはついてきてくれます。

松井：前回と前々回の授業では三味線を体験したのですね。

高橋：今年度の高等部のテーマは「和」と決めています。昨年度はフラメンコを取り上げました。その年によってテーマを決めており、先生がたの特技などをお聞きしながら、どちらも実現しました。

松井：周囲に多くの協力者がいらっしゃるのですね。以前、ミュージカルの活動をしていたこともありましたよね？

高橋：中学部で教えていた頃、人数も少なかったので、学習発表会という学校行事の中で行うミニミュージカルをつくっていました。１作目は、男女１名ずつ、２人だけの中学部３年生を主役にする「白雪姫と王子様」です。女子生徒は歌が大好きでしたので、私のつくった『白雪姫のテーマ』を歌いました。男子生徒は自閉症でお話をするのが難しい生徒でしたので、「あぁ、そうですか、へいへい」と話す「お付きの者役」の１年生の生徒を加えて、ストーリーを進めました。その女子生徒と十数年ぶりに再会する機会があり、「浩美先生だよ。元気？」と声を掛けたら「♪私の名前は白雪姫～」と『白雪姫のテーマ』を冒頭から歌い始めて最後まで歌ってくれました。もう、あのときはほんとうに嬉しかった……。この歌は、彼女のためだけにつくったんです。

松井：その生徒にとって、そのミュージカルは一生の宝物ですね。

高橋：出番をつくってあげることは重要です。失敗してもいいから、その生徒自身をいちばんよい状態で輝かせることが、私たちのお仕事だと思っています。

松井：音楽は子どもを輝かせることができますよね。音楽がどんなときでも人の心を捉え続けるように、世の中が変わっても、自分の信じる音楽のすばらしさを子どもたちに教えていきたいものです。

大切なのは寄り添うこと

松井：以前勤めていた中学校からこの特別支援学校に異動されて、何年たちますか？

高橋：16年……です。教員生活の約半分をここで過ごしているんだと、最近気付いたところです。

○ 高橋浩美（たかはし・ひろみ）
埼玉県立秩父特別支援学校 教諭

松井：それだけ長くなると、考えることも多いでしょう？

高橋：そうですね。ここに来てよかったと思います。中学校のときは、よい合唱をつくることに力を入れていましたが、ほんとうはもっともっと大事な部分があって。そういうことを勉強させていただきました。

松井：高橋先生は今後ご退職までの間、どのようなことを行っていきたいとお考えですか？

高橋：まずは、この学校における重複に在籍する生徒の音楽の授業スタイルを

『秩父音頭』を歌う生徒たち。運動会では立候補者がマイクを用いて歌う。
今年は４人の立候補があった

太鼓をたたくのは、学校の特別活動で太鼓を学ぶ生徒

つくりたいです。音源などをつくっておけば、音楽の先生がいなくてもみんなで共有できます。それから、退職後も音楽を柱にして生きていきたいので、私自身の引き出しづくりをしたいと思っています。教材研究をしたり、先生がたの取り組みを学んだり、本を読んだり……。それらはきっと、いつか誰かの役に立って、その人の笑顔を見ることで私も元気になれる。たくさんの人たちと音楽を通して楽しい時間を過ごしたり、皆さんを笑顔にしたりするために学び続けたいな、と。なんだか、かっこいいこと言ってますね(笑)。

松井：高橋先生はいつもチャレンジ精神旺盛で、すばらしいなと思います。

高橋：チャレンジするのは自分が楽しいからですし、やっぱり音楽が好きだからです。今日、こうして松井先生とお話しができるのも、約30年前に音楽を通した出会いがあったからこそです。

松井：早いものですね。

高橋：松井先生にお会いしていなければ『旅立ちの日に』も生まれず、今この時間もなかったかもしれない。不思議ですよね。

松井：ほんとうに感慨深いことです。最後に、特別支援学校で教えるうえで、いちばん大切なのは何でしょうか？

高橋：……その子の隣に寄り添う。それに尽きるかな？常に「一緒に考えようよ。先生にできることは何かな？」というスタンスで接することです。特別支援学校は、いろいろな苦しさを抱えている生徒たちばかりですが、その苦しさにはきちんとした理由がある。それをしっかり聞いて受け止めて、「じゃあ、それを解決するために先生にできることはないかな。教えて？一緒に考えて歩んでいこう」と。うまくいかないこともありますが、一人一人と向き合うことが大事なのではないでしょうか。この学校では、児童生徒が毎日学校に来るだけでも奇跡です。学校の玄関を入って来る児童生徒たちに対して偉いなと思うし、「よく来たね、今日もがんばろうね」と声を掛けることを大切にしています。

松井：通常の学級でも、根底は同じことですよね。今、個に応じた指導が大事だといわれていますが、集団ではなかなか難しい。現在、私は大学で教えていますが、そこでも一人一人に寄り添うことがとても大事だと感じます。教育の本質に迫ることができるのが特別支援学校だと心から思いました。今日はありがとうございました。

校長先生より

本校は昭和40年に知的障害教育校として開校し、平成12年に知的障害と肢体不自由の両部門を併設した埼玉県内で最初の学校で、今年度の児童生徒数は123人(知的部門100名、肢体部門23名)です。
特別支援学校での教育内容は全てにつながりますから、高橋先生の授業は通常の学級の先生がたにも参考にしていただけるのではないでしょうか。本校の児童生徒たちが一人でできることを少しでも増やし、社会に出たときに、いろいろなことができるのを周囲のかたに知っていただくことが私の願いです。

大澤 充 先生
埼玉県立秩父特別支援学校 校長

フィガロとスザンナの二重唱。観客の目線を意識して演じる

授業者に訊く ②

三宅悠太氏と澤田育子先生

２校目は、演奏実技や理論を専門的に学ぶための音楽科が設置されている岐阜県立加納高等学校を訪ねました。音楽科には、ピアノや声楽、弦楽器、管楽器など、さまざまな専攻の生徒が在籍しています。今回参観した「演奏研究」の授業では、声楽専攻の３年生６名がペアをつくり、オペラ『フィガロの結婚』から３つの場面を実演。観客の目線を意識しながら表現を追求する姿勢が印象的でした。対談では、オペラの曲をあえて日本語で歌うメリットやその効果についてもお話を伺いました。

授業者：澤田育子（岐阜県立加納高等学校 音楽科）　**聞き手：三宅悠太**（作曲家）

本時の授業の位置付け

この演奏研究では、オペラ『フィガロの結婚』から３つの場面を切り取り、小道具を用いて演技をしながら重唱で表現します。オペラにおける表現を、体験を通して理解することが目的です。この授業で生徒は、初めて演技を付けて歌い、さらに、日本語とイタリア語の両方を学習します。言葉の明瞭さやアクセント、響きのある発声を意識しながら音楽表現するとともに、不自然にならないよう工夫しながら演技表現することを目指します。生徒自ら考え、工夫し、高める力を育てるために、何度も録画を行い、そのつど確認しながら改善を重ねるようにしていきます。

授業の流れ

	学習の内容、学習活動
導入	○ オペラ全体における3つの場面の状況と心情を把握する。 ○ 以下の3つの場面を演技付きで日本語で表現する。 ・第一幕から、フィガロとスザンナの二重唱 ・第一幕から、マルチェリーナとスザンナの二重唱 ・第二幕から、スザンナとケルビーノの二重唱
展開	○ それぞれのグループの表現について、工夫するとよい点を意見交換する。 ○ グループで改善したいことなどを話し合いながら練習する。
まとめ	○ 意見交換したことを生かした表現で発表する。 ○ 音楽全体の流れと表現について再度意見交換する。

一人一人の個性を開花させる授業
── 表現者の育成を目指して

観客の目線を意識して

三宅：明るい雰囲気で笑顔の絶えない授業が印象的でした。澤田先生は授業づくりにおいてどんなことを大切にされていますか？

○ 三宅悠太（みやけ・ゆうた）
作曲家。武蔵野音楽大学、聖心女子大学、都立総合芸術高等学校、各非常勤講師

澤田：何かを教えようとは思っていないんです。各々の生徒がもつ感性や個性は、教えるよりも「引き出す」ものだと考えています。

三宅：生徒どうしで考えたり、感想を言い合ったりしながら、自分たちで発見するよう促していましたね。ピアニストはピアノ専攻の生徒が務めているのですか？

澤田：そうです。一緒に音楽づくりをしていけるよう、最初からずっと来てもらっています。

三宅：ともに音楽をつくり上げるという感じが伝わってきました。歌い手の生徒がピアニストのそばに行って、「ここはこういう感じでブレスをするから」とブレスのニュアンスを伝えている場面がありましたよね。最初はややぎこちなかったのに、最後の発表時には歌い手とピアニストの呼吸のアンサンブルががらっと変わっていたのがすばらしかったです。

澤田：全体的に、生徒間の風通しのよさがベースにあるので、自分を大切にしながらも他者をよく受け止めています。そうしたポジティブなつながりは音楽には不可欠で、特に歌の場合はそれがないと生き生きとした表現ができないものです。

三宅：授業を通して最も印象に残ったのは、いわゆる「お客さん目線」を常に意識させていることです。澤田先生がしきりに「客観的に」という言葉を投げかけ、「ビデオを撮ってみよう」という示唆もありました。「まず自分たちが感じること、そしてそれが伝わることが大事だよ」というお話をされていましたね。

澤田：まさにそれが伝えたかったことです。「お客さんが楽しくなるように、幸せになるように」と生徒たちにいつも言っています。「何のために音楽をやるの？」という疑問に対し、もちろん自分のためでもあるけれど、「聴いてくれる人のため」という気持ちをもってほしいのです。「音楽を聴いてくれる人が幸せにならなきゃいけない。そのためにはどうしようか？」と、日頃から考えさせるようにしています。

三宅：１年生のうちからですか？

澤田：はい。学年を問わず、「聴いてくださる人に対して、適当な演奏をするのは絶対にいけない」と厳しく言うこともあります。でも今日の授業のように、一生懸命やったことに対しては必ずほめます。表現者は一人ではどうにもならない。聴いてくれる人、見てくれる人がいてこそ表現者になり得るので、その人たちの目線を忘れてはいけないと生徒たちに伝えています。お客さんが途中で他のことを考えたくなるような演奏ではダメなんです。

三宅：ほんとうによい映画や舞台を観ているときは没頭する。音楽も同じですね。

澤田：三宅先生も合唱の指導をされるときに、「推進力をもって」「曲の山に向かっていく息の流れを大切に」といったことをおっしゃいますよね。やはりそれができていないと、聴いている人はつまらないと思うんです。ただ上手なだけではおもしろくないですから。

歌い手が伴奏者にブレスのタイミングやニュアンスを伝える。こうしたコミュニケーションの場面が随所に見られた

三宅：澤田先生が生徒たちに伝えていたことは、具体的にはテンポに関するアドヴァイスだったり、ちょっとした動きに対するサジェスチョンだったりしましたが、それらを工夫することで、「どこに音楽が向かっていくのか」という一つの流れが出来上がっていったように感じます。授業の開始時に比べると、最後の演奏は「この先もずっと聴いていたいな」と思わせてくれるものでした。やはり客観的な目線をもつことが、そうした演奏につながっていくのでしょうね。

オペラを日本語で歌う試み

三宅：技術的な指導はどのようになさっていますか？

澤田：「日本語の歌詞を、きちんとした響きのある声で歌う」という練習を徹底的にしました。本来イタリア語で歌うはずのオペラを日本語で歌うということで、最初はとてもぎこちなかったんです。生徒たちもイタリア語で歌うほうが響きがいいということは分かっていて……。でも今回私が目指したのは、歌詞に書いてある内容をちゃんと自分で理解して、それを表現するということでした。イタリア語だと気持ちがなかなか入りづらいのですが、自分の感じたことを日本語で表現してみると、曲がよく分かるようになるんです。

三宅：澤田先生は「実感する」ということをベースにされているのを強く感じます。音大生でも、イタリア語で歌うときに実感を伴っているかというと、実はなかなかできていないかもしれません。呪文のように歌っていることも……。オペラを日本語で歌うのはなんだか格好悪いなと感じるかたがいらっしゃるかもしれませんが、試しにやってみることで新しい発見もありそうです。

澤田：モーツァルトの曲はイタリア語のイントネーションが全部うまくはまるようになっているのに、日本語で歌ってみるとイントネーションがおかしなことになりますよね。でも、あえて日本語で一度歌ってみることによって、イタリア語がほんとうによくはまっていることが、より実感を伴って理解できるようになります。

三宅：いかにイタリア語のイントネーションと音楽が一体化したものであるのかが分かるということですね。

澤田：経験の少ない高校生にとって、いきなりイタリア語で歌うよりも、日本語と比較して歌ってみるほうが、イタリア語の響きを実感できるのではないかという意図がありました。

三宅：私も出張レッスンを行うとき、「実際に音を出しながら比較する」ということを意識しています。今日の授業でオペラをあえて日本語で歌ったのと同じように、例えば「転調しているところを転調していなかったらこんなふうになる」と示して、音で実感してもらうようにしています。今回の試みで最も苦労されたのはどんなことですか？

澤田：日本語は普通に歌ってもうまく響かないというか、母音の響かせ方で音色が変わってしまうので、１つのフレーズの中で同じ音色で歌うというのはかなり高度な技術が必要です。でも、それができないと歌を表現しきれないので、日本語できちんと歌うにはどうしたらいいかということを、授業の早い段階で学ばせました。

三宅：日本語のディクション（発音法）については、１つ目のグループが歌詞に出てくる「御用とあらば」の母音「お」と「あ」の発音の工夫をしていましたね。日本語でも一切妥協することなく、どうすればよりよい表現になるか自分たちで考えているのを端々で感じました。

澤田：きちんとした日本語に聞こえるように歌おうとすると、かなり大変なのですが、ある意味とてもよい勉強をしたはずです。今までそんなふうに考えたこともなかったと思いますし。邪道だと思われるかもしれませんが、生徒たちにとって意味のあることです。この体験を経て、次に日本歌曲を歌うときには、日本語らしく聞こえるように歌うことが自然とできるようになります。

三宅：なるほど、そういうよさもあるのですね。

澤田：何も考えずに日本歌曲を歌わせる

○ 澤田育子（さわだ・いくこ）
岐阜県立加納高等学校 音楽科教諭

と、日本語なのに何を言っているのか分からない場合があります。今のうちに苦労して日本語を美しく響かせて歌う技術を学んでおくと、あとは自分で気付いて修正できようになると思いますので、がんばってもらいたいところです。

表現者としての学び合い

三宅：今日は声楽専攻の生徒たちの授業でしたが、他の専攻の生徒たちも、お互いにアドヴァイスし合う場面はありますか？

澤田：音楽科の特徴の一つに、文化祭で行うミュージカルがあります。今年の演目は『エリザベート』ですが、それを音楽科の全員でつくり上げるんです。役もオーディションで選び、先輩後輩の枠を超えた、音楽表現者としての学び合いができているようです。

三宅：例えば、ピアノ専攻の生徒もキャストとして歌ったり、弦楽器専攻の生徒がオーケストラのメンバーで演奏したりするのでしょうか？

澤田：はい、１年生から３年生まで全員参加です。小道具や衣装まで全て役割を決めます。授業として位置付けているわけではないので、ロングホームルームの時間に一斉練習をし、あとは空いている時間や放課後にキャストどうしで練習したり、弦楽器どうしで合わせたりしています。

三宅：自分たちで発見して学び合っているのですね。そういう体験はこれから彼らが音楽と関わっていく中でのベースになっていくと思います。

澤田：生徒たちは素直だけれども、ただ教師に言われたことをそのままやるという感じではなくて、自分の中で納得したものを生き生きと表出していくことができるのです。そういう場面を見ると私も感動します。

音楽科の課題と展望

三宅：加納高校は、普通科が８クラス、美術科と音楽科がそれぞれ１クラスずつあると伺いました。音楽科では具体的にどのようなカリキュラムが組まれていますか？

澤田：各専攻の実技レッスンはもちろん、聴音や視唱などのソルフェージュに加え、和声や音楽史もあります。演奏研究の授業は今日のように専攻ごとに行い、ピアノ専攻だったら連弾をします。また、全員が参加する合唱や合奏の授業もあります。

三宅：音楽科として、どんなことを大事にされているのでしょうか？

澤田：専門の授業はもちろん重要です。けれども「勉強もしっかりやりなさい」と言っています。例えば、定期演奏会は実技テストの上位者が出ることになっていますが、他の教科で赤点を取っていると出られないようになっています。音楽だけしかできないと大人になってからいろいろと支障が出てきますので、音楽以外のことも勉強してほしいのです。

三宅：私は普通科の高校に通ったのですが、作曲を学ぶために高校１年生で弟子入りしたとき、恩師から「学校の勉強を大切にしなさい」と言われたことを思い出しました。そして社会に出てから、あのとき言われた言葉の意味がやっと分かるようになってきました。

澤田：世の中に羽ばたいていくにはバランスも必要ですからね。

三宅：普通科との大きな違いというのは何でしょうか？

澤田：やはり「仲間」ですね。音楽に対してのストイックな気持ちを皆がもっているので、お互いに高め合い、磨き合うという点が音楽科の特徴だと思います。今日の授業も、「歌で磨き合おう」という仲間が集まっているから、あのような表現ができるのだと感じます。

三宅：技能だけなら個人的にレッスンを受ければ身に付きますが、やはり切磋琢磨する仲間がいてこそ見えてくる世界もありますよね。周りの演奏を聴いて、ときにはショックを受けたり奮い立ったりすることがあるかもしれませんが、そこから受けるエネルギーというのは計り知れないものです。貴重な仲間との出会いの場といえるかもしれません。音楽科にはそのようなメリットがありますが、今後の課題や展望についてはどのようにお考えですか？

マルチェリーナとスザンナの二重唱。小道具を用いて白熱した演技が繰り広げられる

グループ練習の様子。改善点について話し合い、さまざまな表現を積極的に試す

スザンナとケルビーノの二重唱。最後の発表時には表情がより豊かになった

澤田：音楽を勉強しても就職先がないとか、将来どうしたらいいのだろうと考える人も多いけれど、その一方で、「没個性」というのが社会問題にもなっていて、やっと「あなたは、ほんとうは何がしたいのか？」ということが問われる時代が来ていると感じます。

三宅：たしかに気運が変わってきているかもしれませんね。終身雇用でずっと同じ会社で働く人の割合も減ってきている時代ですし。

澤田：私は19年前にもこの学校で教えていて、他の高校を回って戻ってきたのですが、当時と今とでは時代が異なっていることを感じます。昔はピアノを習わせる家庭が多かったけれど、今はピアノがある家も少ないですよね。そんな社会情勢なので、「音楽をほんとうにやりたい」と思う子どもがいたら大切に伸ばしていってあげてほしいと願っています。本人がどうしたいかということをもっと尊重することができれば、子どもにとっても社会全体にとってもプラスになるのではないかと思います。

三宅：そのうえで、高校の音楽科で教えることの可能性について、澤田先生はどのようにお考えですか？

澤田：最初にも触れましたが、私たちの立場は、教えるのではなくて「引き出す」という方向に行くべきだと考えています。「表現したい」という純粋な気持ちを前にしたら、もう先生と生徒という関係を超えているんですよ。だから、一人一人の個性に気付いてそれを開いてあげたい。「大成するために何が足りないか」というアドヴァイスをするのが教師の役割だと思っています。もちろん、その子が真にそうなりたいと思っていなければアドヴァイスもできないし、教師の言葉だけでは育っていかないので、生徒の希望と一致しなければなりませんが。生徒の希望があって、それを教師がシフトアップする形が理想ですね。生徒がもっているすばらしい個性というのは、教えるのではなく「開かせる」ものだと思っています。

三宅：まさに「開かせる」ための授業でしたね。さまざまな瞬間にそのエッセンスを感じました。本日はありがとうございました。

校長先生より

普通科、音楽科、美術科の三科で構成されている本校では、将来、優れた芸術家や指導者となって活躍できるよう、個性豊かな生徒を育てていくことを目指しています。シンボルマークは校章に描かれている白梅。生徒、保護者、地域のかたがた、卒業生、そして教員たちが、「チーム白梅」として力を合わせ、魅力あふれる学校をつくっています。

髙田広彦 先生
岐阜県立加納高等学校 校長

レポート

作曲家 三宅悠太

『ごんぎつね』のふるさとへ

教育芸術社では、長年にわたり日本の昔話や童話を取り上げた歌唱教材を開発してきました。その経験を生かし、令和２年度から使用される検定教科書『小学生の音楽４』には、新美南吉の代表作『ごんぎつね』をテーマにした新たな歌が掲載されます。国語の教科書でもおなじみのこの物語は、素朴な風景を描きながらも道徳的な示唆が込められた作品。今回は、作曲を担当した三宅悠太氏が、『ごんぎつね』に描かれている世界や作者の思いに迫るべく、愛知県半田市にある新美南吉記念館を訪れ、同館学芸員の遠山光嗣氏にお話を伺いました。

お話を伺ったかた

遠山光嗣（とおやま・こうじ）
新美南吉記念館学芸員

東京藝術大学作曲科をアカンサス音楽賞および同声会賞を受賞して卒業後、同大学院修士課程作曲専攻修了、音楽学部教育研究助手を３年間務める。在学中、奏楽堂日本歌曲コンクール第12回作曲部門第１位、ならびに第79回日本音楽コンクール作曲部門第１位、併せて岩谷賞（聴衆賞）および明治安田賞受賞。現代音楽から室内楽、舞台音楽、合唱曲、教科書掲載曲に至るまで多岐にわたる作編曲を手がけ、2016年には第83回NHK全国学校音楽コンクール高等学校の部課題曲《次元》の作曲を担当し、作家の朝井リョウ（作詞）とのコンビで注目を集めた。作編曲活動の傍ら、全国各地より招聘され講習会講師やコンクール審査員等を務めている。現在、武蔵野音楽大学、聖心女子大学、都立総合芸術高等学校、各非常勤講師。日本音楽教育学会会員。

取材

三宅悠太（みやけ・ゆうた）

新美南吉記念館
愛知県半田市岩滑西町1-10-1
(TEL) 0569-26-4888
(FAX) 0569-26-4889
開館時間：午前9時30分～午後5時30分
休館日：毎週月曜日・毎月第２火曜日（祝日または振替休日の場合は開館し、その翌日が休館）・年末年始

童話の世界に触れて

── 館内には南吉の童話の世界が広がっていますね。
天井を見上げると「はりきり網」があります。これは兵十がうなぎを捕るときに使っていた網ですね。川幅いっぱいに網を張り切って使うから「はりきり網」と呼びます。木の杭を川底に打ち込んで網を固定すると、上流から泳いでくる魚がこの網の中に入る仕組みです。

── 展示されている網は、昔のものと同じですか？
構造は一緒です。水族館の学芸員さんにこのような網が売られている場所を教えていただき手に入れました。網の中の輪っかは、特注して竹で作ってもらいました。子どもたちには、やはり本物を見てほしいので。

── 本物に勝るものはありませんね。
学校で出前授業をするときには、お話にも出てくる火縄銃を見せます。骨董品扱いなので触らせても大丈夫なんです。本物を持ってみると、その重みが実感できる。感想を聞くと、声をそろえて「銃が重かった」と。そういうところから子どもたちが興味をもち、作品の理解につながればと思っています。

天井からつるされた「はりきり網」

南吉の生家。父が畳屋を、継母が下駄屋を営んでいた。家が面している通りは、昔は往来の多い幹線道路で、南吉は行き交う人々をよく観察していたという。

南吉の生い立ち

── 南吉はどんな子どもだったのでしょうか？
南吉は畳屋の家に生まれ、もとは渡辺正八という名前でした。どうして新美になるかというと、南吉が４歳のときにお母さんが病気で亡くなり、その後お父さんが再婚します。そして弟が生まれる。その頃、実のお母さんの実家である新美家には跡取りがなく、南吉を養子にするという話になりました。南吉はそのときまだ８歳。養子になったものの、半年もたたないうちに戻ってきてしまうんです。ただ、戸籍上は新美のままです。

── 渡辺家に戻ってからの生活はどんな感じだったのですか？
戻ってきたものの、年の離れた弟がいますし、思いっきり甘えることはできなかったかもしれません。そのような幼児期を過ごしたことから、「困難があるけれど、それを越えて愛を求めていく」という作品が多く生み出されたのだと思います。

── 生い立ちが作品に影響しているのですね。学校には居場所があったのでしょうか？
それは大丈夫でした。成績がほぼ全て「甲」※です。６年生の体操で１回だけ「乙」のときがありますけれど、あとは「全甲」の優秀な子でした。劣等感を感じることはなかったでしょうね。

※「甲」「乙」「丙」の3段階のうち、「甲」は最も優れている。

悲哀と愛を描いた『ごんぎつね』の誕生

── 小学校卒業後はどうしたのでしょうか？
旧制中学校に進学します。当時は小学校までが義務教育で、中学校に行けるのは１クラスに２～３人しかいませんでした。お父さんも最初は中学校に入れるつもりはなかったようですが、小学校の先生が説得してくれたそうです。南吉は中学２年生から童謡や童話をつくり始めます。大正時代後半から昭和初期にかけては童謡全盛期。同級生が漢詩をやっていたところに南吉が何と言ったかというと、「漢詩なんかやっているのか、今は童謡だぞ」。童謡は時代の最先端だったのでしょう。

── 錚々たる文学人が童謡に夢中になっていた時代ですものね。
「童心にこそ人間性の美しさがある」というのが、この時代の新しい価値観でした。その頃の南吉は日記にこう記しています。

余の作品は、余の天性、性質と大きな理想を含んでいる。だから、これから多くの歴史が展開されて行って、今から何百何千年後でも、若し余の作品が、認められるなら、余は、其処に再び生きる事が出来る。此の点に於て、余は実に幸福と云える。

これを15歳で書いているんです。

── 言葉の力に圧倒されます。
中学３年生で書いたとは思えない文章ですよね。では南吉の「理想」とは何かというと、別のページにこう書かれています。

やはり、ストーリィには、悲哀がなくてはならない。悲哀は愛に変る。

「悲哀」と「愛」は対極のような気がしますけれど、悲しみがあるからこそ愛されたときに心からうれしいと感じますし、悲しい思いをしている人をいたわる心も生まれてくる。初期の作品には悲しい物語が多く、『ごんぎつね』もその一つですが、南吉は悲しみの中から愛情を描こうとしたのだと思います。

── 中学卒業後も勉強を続けたのですか？
師範学校を受験したのですが、体格検査で不合格になってしまうんです。悔しい思いをしたことでしょう。この頃、母校の半田第二尋常小学校（現・岩滑小学校）でたまたま代用教員を募集しており採用されることになりました。この代用教員時代に、児童に語ったお話の一つが『ごんぎつね』なのです。

記念館の近くに流れる矢勝川。9月になると、全長約1.5kmの土手に300万本もの彼岸花が咲き、真っ赤な絨毯に覆われる。奥に見えるのは権現山で、地元では「ごんぎつね（権狐）」は「権現山の狐」だと考えられている。

詩人たちとの出会いを経て、女学校の教員へ

── この頃から本格的な作家活動が始まったのでしょうか？
代用教員として教壇に立ちながら、毎月のように童謡雑誌に投稿していました。北原白秋が関わっている雑誌『コドモノクニ』に自分の童謡が挿絵付きで載ったときには、ものすごく喜んだそうです。南吉が東京に出ることを勧めてくれたのが北原白秋の弟子で詩人の巽聖歌でした。南吉はお父さんを必死に説得して東京外国語学校の英文科に進学。多くの詩人たちと交流し、北原白秋のもとにも通いました。

── 東京で多くの影響を受けたことでしょうね。
東京外国語学校卒業後も東京を離れる気はなかったのですが、体調の悪化から帰郷せざるをえなくなりました。地元に戻ってからは安城高等女学校の先生となります。このとき南吉は24歳。29歳で亡くなるまでこちらに勤めましたが、この時期が経済的にも安定し、落ち着いて創作活動ができたようです。

── 南吉はどんな先生だったのでしょうか？

作文の指導を熱心にしていました。教え子が書いた作文に、南吉はこんなふうにコメントしています。「努力はよく払われている。……(しかし)君自身の独創性で光っている箇所がない。……観察が足りないのである」。人々がこう言っているからではなく、自分の目で見て、感じたことを書きなさい。そうしたことを伝えようとしているのですね。

── 現代に生きる私たちも肝に銘じなければならないことですね。これを女学生一人一人に投げかけているとは。

厳しいところはありますけれど、ほめるところはきちっとほめるというスタンスでした。ある生徒が卒業間際に書いた作文には、たった一言だけ感想を書いています。「すでに文学の域に達している」と。うれしかったことでしょう。その生徒さんは今でも短歌をおやりになっているそうです。

館内には、直筆の原稿や手紙など貴重な資料が展示されている。

取材の様子を動画でご覧いただけます。

https://www.kyogei.co.jp/data_room/vent/vol41_gongitsune.html

歌唱教材『ごんぎつね』
(新井鷗子 作詞／三宅悠太 作曲)は
下記の曲集にも掲載されています。

小学校　学校行事・授業のための新教材集
『ツリーハウスにおいで』
定価(本体800円＋消費税)／B5判／64ページ
準拠CD(別売り)　定価(本体1,500円＋消費税)

対談

南吉が大切にしたもの

左から三宅悠太氏、遠山光嗣氏。南吉の肖像写真の前で。

遠山：南吉は故郷をほぼそのまま描写しながら、読みにくい地名まで躊躇なく物語の中に使っています。なぜそこまで故郷にこだわるのかというと、「実感」を大事にしたというのが一つの理由です。

三宅：実感というものはこれほど重要なのですね。合唱指導をするときにも、曲に対する実感が伴うかどうかで子どもたちの歌声が変わることを思い出しました。

遠山：『ごんぎつね』は国語の教科書に長年採用されている教材なので、学校の先生がたが日本中から記念館に来てくださいます。はるばる県外からも来てくださる理由は、やはり南吉がここで暮らして、この地を舞台に作品を書いた、その実感を子どもたちに伝えたいという熱意からではないでしょうか。

『ごんぎつね』の中で兵十が麦をといでいる場面に出てくる「赤い井戸」。知多半島で採れる土には鉄分が多く含まれており、鉄分を赤く発色させて焼き上げる(常滑焼)。

三宅：子どもたちが記念館を訪れることも多いと思いますが、反応はどうですか？

遠山：子どもは目で見て分かりやすい物が好きなので、お話に出てくる「はりきり網」や「赤い井戸」「火縄銃」といった実物に近寄って興味深そうに見ています。その中で、南吉の生涯や作品の背景にも思いを寄せてくれるといいなあと思っています。

三宅：直筆の日記や写真を見て、お話に描かれている情景を想像する材料や南吉の人生に触れる前と後では、子どもたちの実感も大きく違うでしょうね。

遠山：子どもたちからは、『ごんぎつね』の悲劇的な結末を納得できないという声も耳にします。どうしてあんなすれ違いの結末になったんだろう、と。でも、大人になって、例えば友人や社会とすれ違うことがあるでしょう。自分も相手も悪くないのにすれ違ってしまったとき、ふと『ごんぎつね』のことを思い出すことがあるかもしれません。「人生にはこういうことがあるのだ」と、大人になってしみじみと分かる。南吉はそういう作品を書いたんです。

三宅：時間がたってから思い出したときに、自分の中で熟成されていて、そのつど人生に示唆を与えてくれるもの。私も歌詞に音楽を付けるとき、たとえ今、子どもたちが歌詞の全てを理解するのは難しくても、もしかしたらメロディーの断片を覚えていてくれて、大人になって「あのときこんな詩の内容を歌っていたんだなあ」と実感してもらえたらと願っています。これは童謡運動の時代に作曲家や詩人たちが考えていたことに通ずるかもしれません。

遠山：人生のどこかで共鳴する場面がある。長い目で捉えることも大切ですよね。

三宅：最後に、『ごんぎつね』の歌に触れる子どもたちへ、遠山さんからメッセージをお願いできますか？

遠山：三宅先生が「ごん」の気持ちを考えながら作曲されたように、子どもたちも「ごん」の気持ちになって歌ってくれたら、聴く人の心に迫る歌声になるのではないかと思います。

KYOGEI レポート

アウトリーチを観る

ロンドン交響楽団／ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団／
東京都交響楽団＆新国立劇場合唱団＆サントリーホール オペラ・アカデミー

学校やホール、病院などさまざまな場所を舞台に広がりを見せているアウトリーチ。子どもたちに本物の音楽に触れる機会をつくろうと、文化施設や企業、地方自治体など多くの団体が主催者となって、魅力的な企画を発信しています。ヴァン編集部では、2018～2019年に行われた、世界最高峰の音楽家たちによるアウトリーチを取材しました。それらの模様をレポートします。

サイモン・ラトルとロンドン交響楽団 直前リハーサルを学生に公開

昨秋、サイモン・ラトル率いるロンドン交響楽団が来日した。この公演は2001年から開催されている「TDKオーケストラコンサート」の一環で、一般に公開される演奏会の他、音楽を学ぶ学生のためのプログラム(公開リハーサル)や、出張音楽教育プログラム(アウトリーチ)も行われている。

2018年9月29日に行われたのは、音楽を学ぶ学生を対象とした公開リハーサル。抽選によって230名の学生が会場のサントリーホールに招待された。まずは小ホールで音楽評論家の小沼純一氏(早稲田大学学術院教授)がプレ・レクチャーを行い、リハーサルの観どころを伝えた。次に大ホールへ移動してリハーサル開始である。

ラトルが客席に向けて「私たちのリハーサルにようこそ」とほほえみながら声を掛け、リハーサルはスタートした。シベリウス『交響曲第５番』、シマノフスキ『ヴァイオリン協奏曲第１番』(ヴァイオリン：ジャニーヌ・ヤンセン)、ラヴェル『マ・メール・ロワ』を演奏し、本番前の最後の仕上げとして、ラトルと楽団員が互いに丁寧に音楽をつくり込む様子が見られた。楽団員とまるで昔からの友人のように会話をしながらリハーサルを進めるラトル。だが、音を奏でる瞬間になると一転、彼の指先のわずかな動きで音の出だしはピタリと合い、より緻密で気品あるオーケストラの響きが立ち上がる。

ラトルは2017年にも来日しており、同シリーズの企画でベルリン・フィルハーモニー管弦楽団と白熱した公開リハーサルを繰り広げた。今回の来日は彼の母国であるイギリスのロンドン交響楽団を率いており、終始穏やかな表情で、笑顔が印象的だった。

ふだんは見ることのできない、世界最高峰の音楽家たちが織りなす緊密なやりとりの現場を間近で見られたことは、音楽を学ぶ学生たちにとって貴重な経験になったと思う。

招待された、音楽を学ぶ学生たち

写真提供：TDK株式会社

ロンドン交響楽団ブラス・クインテット 東京と秋田、地域を超えて音楽を発信

2018年9月28日、ロンドン交響楽団ブラス・クインテットが港区立御成門中学校を訪れた。連日続いた寒さが一転、気持ちよく晴れた日のことである。

御成門中学校校長の佐藤太先生は「ロンドン交響楽団さんは、チケットがなかなか手に入らないほどのすばらしい楽団です。今日の演奏を楽しんで、音楽を堪能してほしいです」、港区教育委員会指導主事の東條友美先生は「ロンドン

中央のスクリーン。
鳥海中学校の生徒たちによる返礼演奏の様子

「TDKアウトリーチミニコンサート2018 in港区立御成門中学校」の様子。
上に掲げられた看板は生徒たちの手作り*

交響楽団メンバーによる迫力ある演奏を生で聴くことのできるたいへん貴重な機会です。生演奏には本物の迫力があると思います」と、それぞれの思いを児童生徒に語った。

この「TDKアウトリーチミニコンサート2018 in港区立御成門中学校」は、二元中継でTDK創業者の故郷である秋田県にも中継された。秋田会場の由利本荘市の秋田柴水館には、由利本荘市立鳥海中学校全生徒、鳥海小学校の5、6年生及び関係者合わせて170名が集まり、オンラインでの交流が実現したのである。

拍手を浴びながら体育館に入場したブラス・クインテットのメンバーは、フィリップ・コブ氏とナイアル・キートリー氏(トランペット)、アレクサンダー・エドモンドソン氏(ホルン)、ピーター・ムーア氏(トロンボーン)、ピーター・スミス氏(チューバ)。メイナード作曲『ファンファーレ』を華やかに演奏すると、キートリー氏が「皆さんこんにちは」と挨拶し、メンバーたちが音楽をどのようにつくるのか説明した。続くプログラムはバロック音楽からオペラ、映画音楽、ビートルズに至るまで幅広いジャンルの曲が盛りだくさん。曲間に、「シャイト作曲『戦いのガイヤール』はテンポが速く細やかなパッセージがあり、トランペットどうしがやりとりします」(キートリー氏)、「『誰も寝てはならぬ』はクライマックスに向けてのダイナミックスが印象的です」(ムーア氏)など、メンバーによる曲の解説の他、楽器の説明もあった。

演奏後に設けられた「アーティストへ質問コーナー」では、「音を合わせるときのコツはありますか?」という生徒からの問いに、キートリー氏が「コミュニケーションが大切です。お互いの目を見て、お互いの音を聴き合うことが大事です。自分の音を聴くよりも、相手の音を聴くことが重要です」と答えるなど、計4名の生徒からの質問にメンバーが応じた。

「返礼合唱&演奏」では御成門中学校の校歌合唱と、由利本荘市立鳥海中学校の横笛と太鼓の演奏が行われ、どちらも思いのこもった生き生きとした演奏だった。

このアウトリーチは、世界的な音楽家と、地域を超えた学校どうしとの交流であり、児童生徒が興味津々といった表情でステージに集中する様子が印象に残った。演奏会場の学校だけでなく、中継された学校でも世界的な音楽家のアウトリーチを体験できたことは、たいへん意義深かったと思う。

*写真提供:TDK株式会社

サー・サイモン・ラトル… リヴァプール生まれ。英国王立音楽院で学ぶ。1980〜1998年バーミンガム市交響楽団首席指揮者、2002〜2018年ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者兼芸術監督、2017年〜ロンドン交響楽団音楽監督。ベルリン・フィルとは世界ツアーや多くの録音を行い、教育プログラムを創設するなど新しい分野も開拓した。世界各地の主要オーケストラとも長年にわたり強い信頼関係を築き、オペラの分野でも成果を残している。

ロンドン交響楽団… 1904年創設。イギリス最高にして世界屈指のオーケストラ。年間70回に及ぶコンサートを行い、世界の音楽都市も定期的に訪れる。教育に深く関わり、自主レーベルの「LSO Live」で成功を収めている。『スター・ウォーズ』などの映画音楽も担当している。

「お礼の言葉&記念品贈呈」*

フランツ・ウェルザー=メスト

フランツ・ウェルザー=メストと ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 日本の中学生と高校生のために

世界屈指のオーケストラ、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が2018年11月に来日した。ウィーン・フィルが来日するのは2年ぶり、34回目。その年この名門オーケストラを率いたのは、ウィーン・フィルの拠点であるオーストリア出身のフランツ・ウェルザー=メストである。

来日公演「ウィーン・フィルハーモニー ウィーク インジャパン2018」では、中学生と高校生を対象とする「サントリーホール&ウィーン・フィルの青少年プログラム」(学校単位事前申込み制)も11月20日に開催された。

当日は開場すると、たちまち学校の先生とともにやってきた中学生と高校生で客席は満席となった。プログラムはモーツァルトのオペラ《魔笛》序曲と『ピアノ協奏曲第24番』。ピアニストは世界的人気を誇るラン・ランという、クラシックファンにとっては非常にぜいたくな公演である。プログラムの2曲を熱演後、なんと予定にはなかった曲目の演奏が始まった。ブラームス『交響曲第2番』(抜粋)とワーグナー(ウェルザー=メスト編曲版)《ニーベルングの指環》第3夜『神々の黄昏』から抜粋、ドヴォルジャークの序曲『謝肉祭』である。これらの作品についてウェルザー=メストが解説しながら演奏を進めていった。どんなに技術的に難しい箇所も確実に合わせ、一瞬たりとも気を抜かない。世界が最高峰と認めるウィーン・フィルだからこそのプライドと、生徒たちへの温かで熱い思いがひしひしと伝わってくる。観客は彼らの熱演に、あっという間に引き込まれる空間となった。

そうして公演は、終演予定時間を少し過ぎて幕を下ろした。これまでもウィーン・フィルは、サントリーホールとともに特別プログラムとして「青少年プログラム」や、音楽家を志す若者のために「ウィーン・フィル首席奏者によるマスタークラス」などを来日の度に開催してきた。また2012年から5年間、毎年被災地を訪問するなど、通常のコンサート以外の活動も大切にしている。会場を後にする中学生や高校生はうれしそうな笑顔ばかり。これからも「青少年プログラム」を通して子どもたちが世界最高峰の音楽に触れる機会をもち、このプロジェクトが彼らの豊かな成長の一助となることを願っている。

写真提供:サントリーホール

フランツ・ウェルザー=メスト… リンツ生まれ。2002年よりクリーヴランド管弦楽団音楽監督(現行契約の任期は2022年まで)。2010〜2014年ウィーン国立歌劇場音楽総監督。ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とは客演指揮者として緊密な関係を構築し、共演回数も多い。同楽団のニューイヤー・コンサートの舞台にも2度立ち、ウィーン楽友協会、ルツェルン音楽祭、BBCプロムスで定期的に指揮するほか、日本公演や米国公演でもたびたび指揮をしている。

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団… 1842年創立。1933年からは常任指揮者を置かず、客演指揮者によるコンサートを行っている。これまで世界屈指の名指揮者が指揮台に立っており、ワーグナー、ヴェルディ、ブルックナー、J.シュトラウス2世、ブラームス、マーラー、R.シュトラウスなどが指揮者やソリストとして共演し、自らの作品を世に送り出した伝統あるオーケストラである。

サントリーホール オペラ・アカデミーの歌手たちによる、コンサート鑑賞に向けた事前授業。音楽の授業１コマ(45分)を実施する。監修は味府美香氏(東京成徳大学子ども学部准教授)

指揮者・大野和士が参画
学校とホールで行う芸術体験プログラム

サントリーホールは、東京で最初のコンサート専用ホールとして「世界一美しい響き」をコンセプトに1986年秋、港区赤坂に誕生した。開館当初からオリジナルの主催公演を発信している。子どもたちのための企画も多く、平成26年度からは港区と連携して「港区＆サントリーホール Enjoy! Music プロジェクト」を毎年開催している。これは国際的に活躍する指揮者の大野和士氏が企画したもので、港区立小学校の４年生を対象に、小学校での事前授業とサントリーホールでのコンサート鑑賞参加を一連のプログラムとして実施する。

平成30年度のテーマは前年度と同じく「声の響きを楽しもう」である。子どもたちはあらかじめ音楽の授業で『よろこびの歌』(ベートーヴェン『交響曲第９番』第４楽章より)を学習したのち、サントリーホール オペラ・アカデミー*の歌手たちによる事前授業(12月～２月実施)を受ける。そして２月22日に区内の子どもたちが一堂に会してサントリーホールでプロのオーケストラや合唱団と歌う。しかも子どもたちが歌う歌詞は、原語のドイツ語である。

1月22日、ヴァン編集部が取材した御成門小学校には大田原瑶(ソプラノ)、細井暁子(アルト)、髙畠伸吾(テノール)、石井基幾(バス)の４氏が訪れ、本企画の授業の目的「色々な声部の響きの違いに気づき、その響きを楽しむ。２月のコンサート鑑賞にむけて鑑賞曲の面白さを実際の演奏家の演奏等を通して身近に感じる。」に沿って構成された事前授業を行った。授業開始のチャイムが鳴ると「こんにちは♪」という一言をメロディーにして歌いながら、歌手たちが順に登場。それぞれの声種の得意な音域や、４人のハーモニーを実演して示しながら「声を響かせるためのポイントは５つ。①おなかを意識し、②口を開けて、③姿勢よく、④リラックスしながら、⑤大きく息を吸う。この５つを瞬時に行います」などと説明した。『よろこびの歌』では、発音の難しい箇所をピックアップし「“streng”の“g”は歌いません」「“geteilt”の“t”はつばを飛ばすように」など、子どもたちに技術を細かく伝えていた。子どもたちもそれに応えて懸命に歌い、音楽室は豊かな声で満たされた。このような事前授業が、港区立小学校16校で行われた。

ベートーヴェン『よろこびの歌』をドイツ語で歌う御成門小学校の４年生

プロの音楽家と小学４年生たちが歌う『よろこびの歌』

２月22日は、港区立小学校の４年生がサントリーホールに集い、コンサートの本番を迎える日だ。ホール内には着席した子どもたちの明るい声が響いており、それぞれ歌を口ずさんだり、ステージを興味深く見つめたり、引率の先生の話を聞いたりしながら、開演までの時間を過ごしていた。

コンサートが始まると、指揮者の大野和士氏が客席に手を振りながら登場。コンサートのプログラムは３部に分かれており、最初の「『一人の声』から『二人の声』へ」では、モーツァルトの歌劇《魔笛》より、パパゲーノのアリア『おいらは鳥刺しさ』、夜の女王のアリア『復讐の炎は地獄のようにわが心に燃え』、パパゲーノとパパゲーナの二重唱『パ・パ・パ』が演奏された。男声と女声のソロ、続いて男女の二重唱になり、それぞれの声とその重なりを感じることができる。

次の「合唱のひびきをきこう」では、ソリストの安井陽子氏が「みんなで声を出してみましょう。声は世界に１つだけの楽器です」と子どもたちを促し、会場の子どもたち全員で「ドミソ」でハーモニーをつくる場面があった。そしてオーケストラと合唱団が、ヘンデルのオラトリオ《メサイア》より『ハレルヤ・コーラス』、ヴェルディの歌劇《アイーダ》より『凱旋行進曲』(抜粋)を演奏。子どもたちは集中して音楽に耳を傾けていた。

＊サントリーホール オペラ・アカデミー：音楽大学等での学業期を終えてプロフェッショナルを目指す若き声楽家及びピアニストを対象に開講(応募・審査により若干名を選出)。

最後の「みんなで歌おう」は、いよいよ子どもたちによる『よろこびの歌』だ。オーケストラに合わせて『よろこびの歌』を歌ったあと、大野氏は曲について「冒頭の“Freude”の発音は“お風呂”とは違うよ(笑)」「この曲に出てくる兄弟たちという意味の“Brüder”は、とても大切な言葉です。口を前に出すように発音して、しっかり歌ってくださいね」など、冗談も交えながらポイントを絞って具体的に説明し、子どもたちと一緒に音を出す。プロの合唱のみによる演奏も披露して、子どもたちの表情は真剣そのもの。合唱がまとまったところで大野氏が「それでは皆さんの歌声で、力いっぱい喜びを与えてください！」と子どもたちに伝えた。オーケストラの音が聴こえなくなるほど子どもたちの伸びやかな歌声がホール中に響き渡り、コンサートは終了した。大野氏は「これからもよい旅を！また会いましょう」と笑顔で声を掛けて、ステージを後にした。コンサートを終えた子どもたちの表情はみんなキラキラしており、その様子を見ているだけでうれしくなった。音楽が人々に欠かせないものであることを再認識する機会であった。　(ヴァン編集部)

写真提供：サントリーホール
※ドイツ語詞の読み方は当日のプログラムに基づいています。

大野和士… 1987年トスカニーニ国際指揮者コンクール優勝後、オペラ、シンフォニーの両分野において世界各地で活躍。音楽教育プログラムにも熱心に取り組んでいる。バーデン州立歌劇場音楽総監督、ベルギー王立歌劇場(モネ劇場)音楽監督、アルトゥーロ・トスカニーニ・フィルハーモニー管弦楽団首席客演指揮者、フランス国立リヨン歌劇場首席指揮者を歴任。2015年より東京都交響楽団音楽監督及びバルセロナ交響楽団音楽監督。2018年9月、新国立劇場オペラ部門芸術監督に就任。

平成30年度 港区＆サントリーホール Enjoy! Music プロジェクト〈コンサート〉
日程：2019年2月22日　会場：サントリーホール 大ホール
参加：港区立小学校４年生 17校参加(児童数：1,359名)
指揮・お話：大野和士　ソプラノ：安井陽子、九嶋香奈枝　バリトン：吉川健一
合唱：新国立劇場合唱団＆サントリーホール オペラ・アカデミー(合唱指揮：冨平恭平)　管弦楽：東京都交響楽団　事前授業講師：サントリーホール オペラ・アカデミー〔大田原 瑶、金子 響(ソプラノ)、細井暁子、山下未紗(アルト)、髙畠伸吾(テノール)、石井基幾、澤地 豪(バス)〕　監修：味府美香

コンサートを終えた港区立小学校の子どもたち

【主催】港区／港区教育委員会／(公財)港区スポーツふれあい文化健康財団／サントリーホール

Kyogei Presents

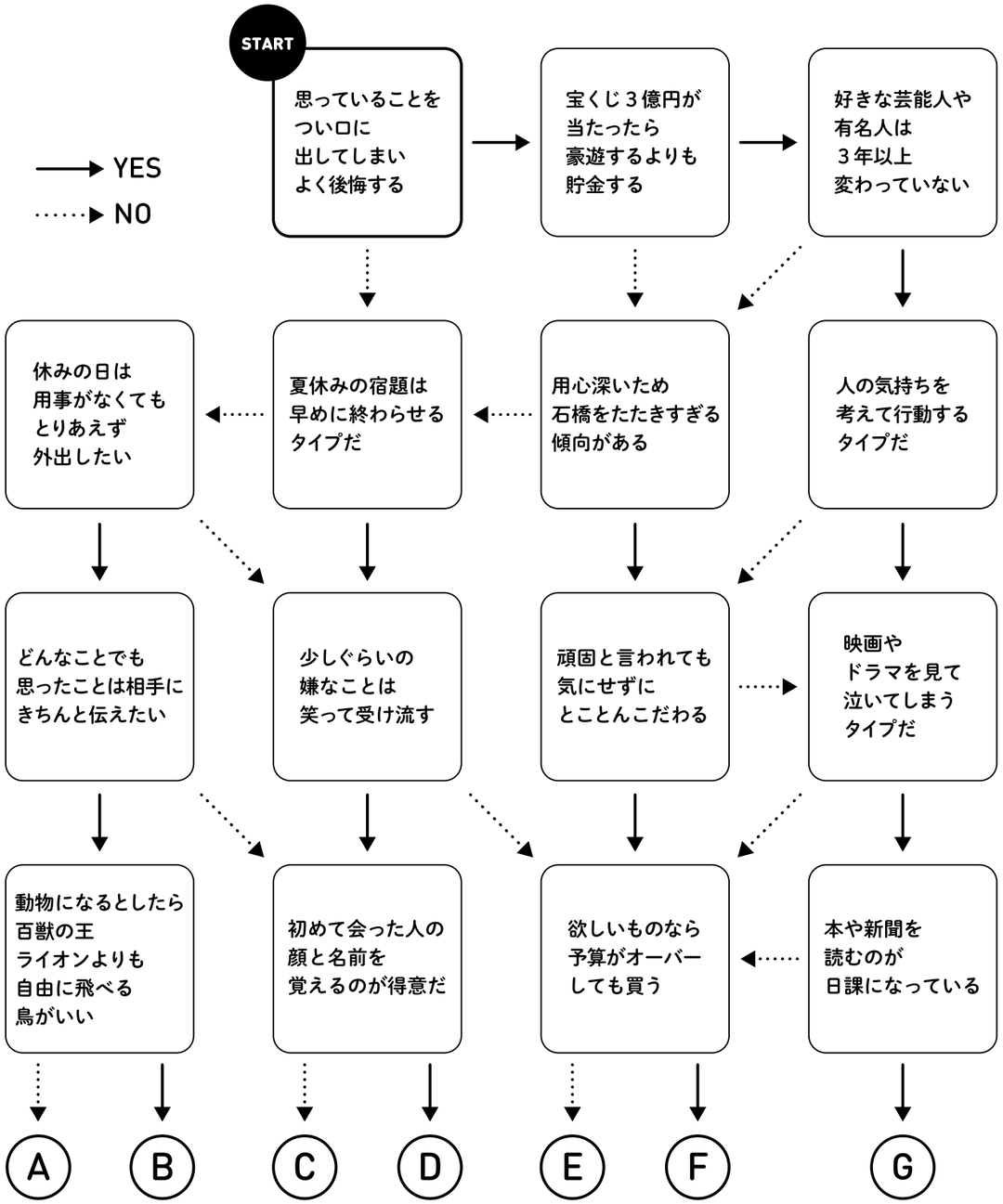
音楽診断

第６回

名作オペラ編

『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第６弾。今回のテーマは名作オペラです。
有名な名作オペラの登場人物７人の中から、あなたに似ている人物をご紹介します。

監修・解説＝岸 純信
Text＝Suminobu Kishi



登場人物をご覧いただく前に……

名作オペラあらすじ

『カルメン』

（初演：1875年3月3日／パリ、オペラ＝コミック座）

まじめな軍人ホセが、野性的な「流浪の民の女」カルメンに魅入られ、彼女の愛のとりこになってしまった結果、軍隊を脱走して密輸団の一味に加わることに。最後には、自分を捨てて新しい愛人エスカミーリョのもとに走るカルメンが許せず、刺し殺してしまう。

『アイーダ』

（初演：1871年12月24日／エジプト、カイロ歌劇場）

古代エジプトの女奴隷アイーダは、実は敗戦国エチオピアの王女でありながら、身分を隠してエジプトの王女アムネリスに仕えている。そのアムネリスが愛する武将ラダメスは、実はアイーダと恋仲の身。２人の関係に気付いたアムネリスは嫉妬に燃え、威嚇する。

『椿姫』

（初演：1853年３月６日／ヴェネツィア、フェニーチェ座）

富裕なパトロンに身体を捧げる高級娼婦ヴィオレッタの前に、「心から愛している」と告げる青年アルフレードが現れる。葛藤したうえで、享楽的な暮らしを捨てて彼のもとに走るヴィオレッタだが、青年の父に別れを強要された挙句、胸の病で死の床についてしまう。

『愛の妙薬』

（初演：1832年５月12日／ミラノ、カノッビアーナ劇場）

純朴青年ネモリーノは気の強い娘アディーナに恋するが、彼女は優柔不断なネモリーノにあてつけるため、軍曹ベルコーレのプロポーズを勢いで受ける。救いを求めてネモリーノは、いかさま医師ドゥルカマーラが勧めるまま、愛の妙薬（単なるワイン）を口にする。

『トゥーランドット』

（初演：1926年４月25日／ミラノ、スカラ座）

亡国の王子カラフは北京で父王と再会。付き添いの女奴隷リュウに感謝する。皇女トゥーランドットの美貌に魅了されたカラフは、彼女が出す３つの謎を解くが、激怒した皇女は女奴隷リュウを拷問にかける。リュウは「愛の尊さ」を訴えて自刃。王子は皇女を愛で征服する。

Ⓐ 決断力がある行動派 負けず嫌いだけど人情にあつい
アムネリス『アイーダ』

エジプトの王女。武将ラダメスを愛している。女奴隷アイーダが自分の恋敵と知ると、「身分の卑しいお前に勝ち目はない」と散々に痛めつけ、エチオピアに勝利したラダメスと結婚せよと父国王から言われて有頂天になる。

Ⓑ 好奇心旺盛で情熱的 だけど自由気ままがいちばん
カルメン『カルメン』

流浪の民ロマの女。密輸団とつながっている。興味をもった男にはすぐに言い寄る性格で、軍人ホセを新しい恋人にする。しかし、彼に束縛されたと感じた途端、別の男に乗り換えようとして、ホセに殺される。

Ⓒ いつも穏やかで優しい いちずでまっすぐの清廉な人
アイーダ『アイーダ』

敗戦国エチオピアの王女。父王と生き別れ、身分を隠して敵国エジプトの宮廷に入り、王女アムネリスの女奴隷になる。そこでエジプトの武将ラダメスと恋仲になるが、同じくラダメスを愛するアムネリスに嫉妬される。

Ⓓ チャレンジ精神が強く どんな逆境にも立ち向かう
カラフ『トゥーランドット』

国を滅ぼされた西域の王子。目の見えない父王ティムールとは北京の雑踏で再会し、介添えの女奴隷リュウとも巡り合う。絶世の美女であるトゥーランドット姫に求婚し、見事に謎を解き、抵抗する皇女に本物の愛を教える。

Ⓔ 信念は曲げない 気高いオーラを放つ
トゥーランドット『トゥーランドット』

古代中国の皇女。美しく誇り高い。求婚してくる異国の王子に３つの謎を与え、解けなければ首をはねるという残酷な所業を繰り返す。しかし、流浪の王子カラフが謎を解いたので、抵抗すべく、女奴隷リュウを拷問にかける。

Ⓕ 素直で優しくちょっと不器用 放っておけない存在
ネモリーノ『愛の妙薬』

田舎の青年。気の強い娘アディーナへの恋心をなかなか言い出せず、愛の妙薬（実は安物のワイン）の力を借りる。しかし、アディーナが軍曹ベルコーレの求婚を受けるので、妙薬をさらに買うべく軍隊に入ろうとする。

Ⓖ 知識豊富で客観的 コミュニケーション能力も高い
ヴィオレッタ『椿姫』

特定の富裕なパトロンと交際する高級娼婦。上流階級と付き合える教養をもつ。地方出身の青年アルフレードの純粋な愛の告白に、「今の生活を捨てるの？」と葛藤しながらも、結局は彼を受け入れるが、現実の厳しさに直面する。

岸 純信（オペラ研究家）

1963年生まれ。『音楽の友』『レコード芸術』『音楽現代』など雑誌や公演プログラムに寄稿。ＣＤ及びＤＶＤ解説多数。NHK Eテレ『ららら♪クラシック』、NHK-FM『オペラ・ファンタスティカ』にたびたび出演。新国立劇場オペラ専門委員。静岡国際オペラコンクール企画運営委員。大阪大学外国語学部非常勤講師（オペラ史）。

教育芸術社ホームページの「資料室」→「音楽教育ヴァン」も併せてご覧ください。

イラストレーション：こばやしみさこ

Information

2019年に予定されている主な研究大会やイベントをご紹介します。

研究大会

10月 October

11日（金）

第61回 北海道音楽教育研究大会 旭川上川大会

旭川市民文化会館 他

〈全道共通主題〉

音楽のよさを生かし、豊かな心と確かな力を育む音楽教育

〈旭川上川大会主題〉

音楽のよさや美しさを感じ、音楽と豊かに関わる力を育む音楽教育の創造

［問い合わせ］
第61回北海道音楽教育研究大会旭川上川大会事務局
旭川市立豊岡小学校 校長 鈴木由美子
〒078-8240 旭川市豊岡10条３丁目
TEL 0166-31-0251／FAX 0166-31-0252

31日（木）、11月1日（金）

令和元年度 全日本音楽教育研究会全国大会
東京大会（総合大会）

全日本音楽教育研究会発足50周年記念

練馬区立練馬文化センター 他

〈大会主題〉

つなげよう 深めよう 生かそう ♪未来を拓く音楽の学び♪

［問い合わせ］
全日本音楽教育研究会全国大会 東京大会（総合大会）事務局
事務局長 江東区立深川第六中学校 副校長 佐藤隆弘
〒135-0023 東京都江東区平野3-6-13
TEL 03-3642-4868／FAX 03-3820-4706
ta-satou@koto-edu.jp

11月 November

7日（木）

第67回 東北音楽教育研究大会 福島大会

福島市音楽堂 他

〈大会主題〉

心にひびく音楽を求めて
～「深い学び」のある音楽科授業の創造～

［問い合わせ］
事務局
川俣町立飯坂小学校 教頭 佐々木信晴
〒960-1401 福島県伊達郡川俣町飯坂字南古堂道内５
TEL 024-566-2440／FAX 024-538-2556

8日（金）

第16回 東海北陸小中学校音楽教育研究大会 愛知大会

令和元年度 愛知県小中学校音楽教育研究大会 一宮大会

－夢織るまちから伝えたい－
音楽の力で 結び織りなす 生きる喜び

一宮市民会館 一宮市立富士小学校

〈研究主題〉

音楽のよさを感じ、かかわり合い、
学びの意味や価値に気付く児童・生徒の育成

［問い合わせ］
大会事務局
一宮市立丹陽南小学校 教頭 山田泰司
〒491-0824 愛知県一宮市丹陽町九日市場2666番地
TEL 0586-28-8713／FAX 0586-77-3033
yamada.taiji0fj@city.ichinomiya.aichi.jp

15日（金）

第61回 関東音楽教育研究会 神奈川大会

よこすか芸術劇場　名浜小学校　横須賀市総合福祉会館
久里浜中学校　神明中学校

〈大会主題〉

音・人・心　ともにつなげる　音楽の力

［申し込み］
https://amarys-jtb.jp/kanburo2019-yokosuka/
［問い合わせ］
事務局
横須賀市立沢山小学校 校長 高橋 忍
〒238-0045 神奈川県横須賀市東逸見町3-35
TEL 046-822-0057／FAX 046-823-9849
takahashi_shinobu@tch.yknet.ed.jp

15日（金）

第50回 中国・四国音楽教育研究大会 徳島大会

阿南市文化会館（夢ホール）他

〈大会主題〉

つなげよう　深めよう　音楽のよろこび

［問い合わせ］
事務局
阿南市立今津小学校 校長 大西育郎
〒779-1115 徳島県阿南市那賀川町敷地238
TEL 0884-42-0702／FAX 0884-42-1225
imadu@mb.pikara.ne.jp

21日（木）、22日（金）

第60回 九州音楽教育研究大会 長崎大会
第59回 長崎県音楽教育研究大会 佐世保大会

アルカスSASEBO 他

〈大会主題〉

さわやか　いきいき　かんどう　いつまでも　温故創新

［問い合わせ］
事務局
佐世保市立日宇小学校 教諭 平島恭子
〒857-1151 佐世保市日宇町284番地
TEL 0956-31-6904／FAX 0956-31-6919

教育芸術社ホームページでは、この他の研究大会やイベントなどの情報も掲載しています。

https://www.kyogei.co.jp/data_room/event/

— 新作合唱曲による公開講座 —

Spring Seminar 2020

コンクール自由曲向けの新曲発表会「Spring Seminar 2020」を開催いたします。
同声・女声・混声の各２曲（全６曲）を作曲者、司会者、合唱団と学びます。
セミナー終了後「小学校の部」「中学校の部」「高等学校の部」に分かれて、Nコン課題曲のワンポイントレクチャーも行います。

- 日　時：2020年3月27日（金）
  12：45～17：20
  会　場：横浜みなとみらいホール
  小ホール
  〒220-0012
  横浜市西区みなとみらい2-3-6
  ［みなとみらい駅（東急東横線直通／みなとみらい線）
  下車、「クイーンズスクエア横浜連絡口」より徒歩3分
  桜木町駅（JR京浜東北線・根岸線／横浜市営地下鉄）
  下車、動く歩道からランドマークプラザ経由で
  クイーンズスクエア1階奥（徒歩12分）］
  参加費：5,000円（高校生以下2,000円）
  資料・楽譜テキスト代を含む
- 司　会：藤原規生
  作曲家：［同声］アベタカヒロ、大熊崇子
  ［女声］土田豊貴、横山潤子
  ［混声］三宅悠太、木下牧子
  合唱団：八千代少年少女合唱団
  （指揮：長岡利香子）
  女声合唱団 ゆめの缶詰
  （指揮：相澤直人）
  Youth Choir Aldebaran（ユースクワイア アルデバラン）
  （指揮：佐藤洋人）
- お問い合わせ：
  株式会社教育芸術社
  スプリングセミナー実行委員会
  TEL 03-3957-1168
  FAX 03-3957-1740
  https://www.kyogei.co.jp/

申込み受付は、2019年12月頃開始予定です。
作曲者、内容などは予告なしに変更となる場合がございます。
最新情報は、スプリングセミナーのFacebookでも発信いたします。
https://fb.me/kgspringseminar

印刷工場沿いには穏やかな駿河湾が広がる

第❷回「印刷」

教科書トリビア

この連載では、1冊の教科書が出来上がるまでの道のりをレポートします。第1回では、教科書用紙を製造している製紙工場をご紹介しました。
第2回のテーマは「印刷」。美しく見やすい紙面がどのように印刷されているのか、その秘密に迫るべく、図書印刷株式会社 沼津工場を取材させていただきました。

図書印刷株式会社 沼津工場… 静岡県沼津市にある、印刷・製本・発送までを行う日本有数の書籍一貫製造工場。教科書の他にも書籍やコミックなどを印刷しています。

本誌のヴァンも図書印刷株式会社で印刷されています。文字や楽譜の見やすさ、イラストや写真の発色のよさをご確認ください。なお、印刷には環境に優しい植物油インキが用いられています。

［ カラー印刷の仕組み ］

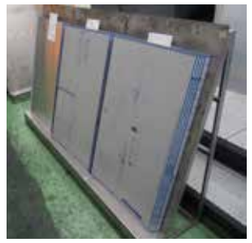
印刷は版画と同じ仕組みで、版にインキを付け、それに紙を当てて転写させます。（印刷機では、版に付いたインキを「ブランケット」と呼ばれるゴムのシートに一度転写してから紙に転写します。）
カラー印刷は通常、「墨（ブラック）」「藍（シアン）」「紅（マゼンタ）」「黄（イエロー）」の4色のインキを使います。4色を重ねていき、カラーの印刷物を再現します。

❶ データ加工

コンピュータを使って、文字や写真、イラストなどを並べ、一つのデータにまとめます。この工程は「プリプレス」と呼ばれます。

❷ 版を作る

印刷をするための版を作ることを「刷版」といいます。プリプレスで出来上がったデータをアルミの板に焼き付けます。赤外線のレーザーで照射して、絵柄を描いていくイメージです。この版は色ごとに必要なので、4枚（4色分）を出力することになります。



これから印刷に使われる版

❸ 印刷をする

印刷物は「網点」という非常に小さな点の集まりでできています。例えば、青の網点と赤の網点を重ねると紫色になります。

①版をセットする：版を機械に取り付ける。機械の中にあるインキ壺から、十数本のローラーを伝わって版にインキが供給される。

②転写する：転写は2段階で行われる。版のインキを、「ブランケット」を巻き付けた円筒に転写し、さらにそれを紙に転写する（オフセット印刷）。カラーの再現は「墨」→「藍」→「紅」→「黄」の順に1色ずつインキを付けて行われる。

「輪転機」と呼ばれる印刷機。
製紙工場で作られた筒状の紙がセットされている

③乾かす：乾かし方は自然乾燥、紫外線を当てて固める方法（UV乾燥）、熱を加えて溶剤成分を蒸発させる方法の3種類がある。

面付け…印刷は1ページずつではなく、紙のサイズに合わせて複数のページを面付けします。一般的には8ページまたは16ページ単位です。

特色…4色（「墨」「藍」「紅」「黄」）では再現できない色を表現するために、特別に調合したインキを「特色」といいます。2～4種類の異なる色のインキを選び、配合比を調整しながらローラーで混ぜて作ります。色味の数値を測る機械もありますが、最終的には人間の目で判断します。

特色の調肉作業

［ 工場の特長 ］

エキスパートを配置

国家資格である印刷技能士1級認定者をはじめ、訓練を積んだ技能士がそれぞれの印刷機で作業しています。経験に裏打ちされた確かな目で、印刷の細かな部分までチェックしていきます。

見本どおりに印刷されているかどうか入念に確認する

建物の設計

工場の建物は建築家の丹下健三氏によって設計されたもので、モダンムーブメント建築150選にも入っています。建物の中央部にある柱だけで屋根を支える構造になっており、柱から壁までの空間がとても広々としています。

環境への配慮

印刷機に供給している水や工場内の飲料水は、地下水を汲み上げたものを使用しています。排水はpH計でチェックし、不純物や溶剤が混ざらないよう浄化しています。沼津工場は海に近いため、海水を守るための配慮が欠かせません。

＼お話を伺いました／
工場長の青藤晃義さん

沼津工場で大切にされていることは何ですか？
⟶ 熟練の技能士が機械を動かし、細心の注意を払いながら作業しています。また、ご要望に沿えるよう、お客様の立ち会いのもとで印刷の説明を行い、色の好みや色調を正確に把握することも重要だと考えています。

教科書を印刷するうえで、難しいことはありますか？
⟶ 児童生徒の皆さんが1年間使ってくださるものですので、丈夫な本を作ることはもちろんですが、印刷では1ページ1ページ、誰が見ても差がないよう品質の安定性に気を配っています。文字の校正をはじめ、写真などの印刷面にゴミが付いていないかも細かくチェックします。経験豊かな従業員と最新鋭の印刷機を設備し、よりよい教科書を提供できるよう努めています。

次号は第3回「製本」です。

編集後記

外を歩けば清風を感じる今日この頃、今年も芸術の秋がやってきました。音楽祭や文化祭、校内合唱コンクールが開かれる学校も多いことでしょう。練習に励む子どもたちと先生がたの様子が目に浮かびます。

アウトリーチの取材のとき「自分の音を聴くよりも、相手の音を聴くことが重要です」とコミュニケーションの大切さを生徒たちに語っていたのは、ロンドン交響楽団のトランペット奏者、ナイアル・キートリー氏。すばらしい音楽の奥には、技術だけではなく相手への配慮や意識など、思いやりという土台があることを感じました。

特集では、新学習指導要領実施に伴う学習評価について、４人の先生がたによる座談会をお届けします。評価のポイントをまとめた資料の他、石井ゆきこ先生と勝山幸子先生の作成による、指導書を用いた実例も掲載しましたので、参考にしていただければ幸いです。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力を賜りました全てのかたに、心より厚く御礼申し上げます。リニューアルしました『ヴァン』を今後ともご支援くださいますよう、お願い申し上げます。

表紙・巻頭イラストレーション
スズキタカノリ

写真撮影
白石文丈

写真提供
サントリーホール
TDK
藤原道山

イラストレーション
こばやしみさこ

表紙デザイン・本文組版
STORK

音楽教育 ヴァン

発行者　株式会社 教育芸術社（代表者 市川かおり）
〒171-0051　東京都豊島区長崎1-12-15
TEL. 03-3957-1175（代）
FAX. 03-3957-1174
https://www.kyogei.co.jp/
©2019 by KYOGEI Music Publishers. Ⓟ-19
本書を無断で複写・複製することは著作権法で禁じられております。

LOVE THE ORIGINAL
楽譜のコピーはやめましょう

＊ヴァン＝“vent”はフランス語で「風」。新しい音楽教育の地平を切り開いていく願いを込めています。

Recommend

中学生のための新しい歌唱教材集
ハートのアンテナ

○中学生に寄せるさまざまな思いから、たくさんの新曲が生まれました。書き下ろしの新曲15曲＋ポップスのアレンジ２曲の全17曲収録。
○収録曲：その先へ／Yes!!／友達の友達／君は君でいい／にんじん／春はいま／ハートのアンテナ／未来への旅／この町が好き／思い出を映して／翼／生きていること／道の途中で／花がほほえむ／忘れることなんかできない／Happiness／明日への序奏
● 定価（本体1,200円＋消費税）／B5判／104ページ
● ISBN978-4-87788-848-0

準拠CD（別売り）
○準拠CDは全曲新規録音。
● 定価（本体2,000円＋消費税）／１枚
● GES-15518

New Song ライブラリー【同声編④】小学生のためのクラス合唱新曲集
僕はアスリート

○入学式から卒業式まで様々な場面で歌える17曲。作曲者によるメッセージを全曲掲載。
○収録曲：PRIDE／さよなら！夏／僕はアスリート／歌が息をする／あじさいの花／くじらが空を泳ぐ／ぼくは ぼく／君がヒーロー／空は今／心のキャッチボール／僕の道しるべ／桜の季節／雲を見上げて／みんなのたいよう／いのちの歌／花の名前／バベルの塔
● 定価（本体1,200円＋消費税）／B5判／96ページ
● ISBN978-4-87788-842-8

準拠CD（別売り）
○全曲の模範演奏を収録。
● 定価（本体2,800円＋消費税）／１枚
● GES-15507

Chorus ONTA Vol.26

○混声合唱のためのパート練習用CD。
○収録曲：おおいなる川～はるかな旅へ～／僕らの夢を届けよう／見上げてごらん夜の星を（三宅悠太編曲）／きらきら／はなさくら／栄光の架橋（相澤直人編曲）／あなたに届けよう／ぜんぶ／さよならの前に／花の名前／Gifts
● 定価（本体12,000円＋消費税）／４枚組
● KGO-1189～1192

松井孝夫 ベストセレクションⅢ
2009～2019［同声（女声）編］

○全曲松井孝夫先生によるライナーノーツ付き。
○収録曲：ここにいる幸せ／キミのもとへ…／幸せのバトン／かけがえのない仲間（とも）／あなたに…／energy／ありがとう～桜咲く頃また会おう～／旅立つ前に／メロディ／たからもの／アルバム／きっと いつかは ぼくだって／きみの空 きみの虹／ゆずれない夢を／たいせつに…
● 定価（本体1,500円＋消費税）／B5判／96ページ
● ISBN978-4-87788-846-6